刻翻『春城日誌』（一二）

——明治四二年一～六月

春城日誌研究会

学苑の第二期発展計画（理工科再興、医科新設、固定基金設置等）を進めるための募金活動が、全面的に始められた年である。

元旦に市島は、年賀の挨拶を交すため大学に赴くが、早すぎたため暖炉は焚かれておらず、折から雪が降りだす有様であった。暫くして、暖炉も暖まり、雪も晴れて人々も集り始めたところで、賀詞と杯を交わし散会した。その後、元校長で基金委員の前島密の私邸を訪れ挨拶をなし、偶々同席の田原栄（維持員、会計監督で第二期発展計画を高田、市島と共に立案した同志）を誘い、行きつけの「伊予紋」で酒席を共にするが、市島は禁酒中ゆえ長居せず帰宅した。

この年の始め、学苑関係者のうち大隈総長と高田学長は東京を離れていたから、市島は自らの立場を十分に認識し、維持員会のメンバーとして、かつ前年九月に就任した基金部長として重要な年の始めの様子をこう記したのであろう。

これに先立つ第一期基金募集は、学苑創立二〇周年を期して、新図書館、高等予科、商科の施設を設けるなどのために行なわれた。目標額三〇万円で、明治三四年から始められた。決算は、四二年八月に行なわれ、申込総額は二六万円であった。

会計監督、評議員であった市島は、専務委員としてこれに関与したが、彼の政治活動を断念させる病床に伏していた頃でもあり、十分にこの募金活動に力を尽したとはいい難かった。しかし、今回の第二期発展計画のための募集では、市島の取り組みは全く違ったものであった。四〇年の暮れに高田、田原と箱根・塔ヶ沢に籠り練り上げた大計画は、募集目標額一五〇万円というもので、一度は維持員会で世上不景気の折から成就を危惧する声が輩出するのを、市島が一人でもやってみせると檄を飛ばし、悲観論を押えスタートしたものであるうえに、自ら基金部長として実質的責任者となっていた。

日誌には、四月に渋沢栄一（二万円）、森村市左衛門（二万円）、安田善次郎（一万円）などの実績が記されている。取り分け二二日に、大隈邸に都内実業家を招き寄付を募った記事があり、その折即決で七名計三万六千円を得た。

後に市島は、大隈重信は寄付の勧誘を「言外に寓するに止め」たが、渋沢栄一（基金管理委員会委員長）は「すべて事務的で、先づ自らの出金額をサッサと定めて、人に肉薄して勧誘さるゝのが例であった。ある時大隈邸に多くの実業家を会した時などは、みづから通路に筆硯を載せた卓子を置き、来客の帰路を扼してみづから申込額を書かれたこともあった」と記した（『早稲田学報』昭和二年三月）。この四月二二日の記事が、それに当たると思われ興味深い。

順調に見えたかのこの募集活動は、六月一五日に三井家より「井上伯（井上馨）の指図にて寄付を断る」との申入れがあり、危機に直面した。また市島の別の記録である『背水録』によると、同じ頃に頼みの渋沢栄一が基金管理委員を辞任したいと表明した。三井家より意向が伝えられた晩に、高田、大隈信常、田中唯一郎と密談、他への波及を考慮し、この事を出来るだけ内密にして活動を続けることとした。渋沢の辞意は撤回されたものと思われ、後も委員に名を連ねている。

市島は三五年に病のため政界から引退し、図書館長として学苑に戻り、会計監督、維持員、基金部長などの要職に

つくなどして、常に高田学監（学長）を扶け学苑経営に尽してきた。さらにこの年の一月には、出版部に設けた校外教育部の副部長（部長は高田学長）に就任した。この校外教育部の活動（早稲田講義録や巡回講演会）が、全国に早稲田の名を広める大きな働きをしたことは周知のことである。

ここに至り、対外的に市島の立場を明らかにする必要が生じたのは当然であり、学苑として学長を補佐する理事の職を新たに設け、これに市島をあてることを六月三〇日に内定した。正式就任は翌月になる。募金活動を中心とした市島の八面六臂の活躍ぶりは、この年の後年以降に発揮される。

募集関係以外について簡単に触れておく。

一月一〇日に、館員小林堅三と「図書館無休主義」について論じ、早くから日曜開館を実施している学苑図書館であるが、検討の結果さらに四六日開館日を増やす決定をみた。明治四二年の開館日は計三一二日である。因みに平成六年度の中央図書館の開館日数は三〇二日であることを考えると、市島らがいかに図書館の開放を考えていたかが窺える。

図書資料の面では、三月に海軍省から、旅順でロシアより拿捕した図書の受入れについて打診があった。これらの図書は五月に八百冊、一一月に五百冊寄贈された。後に片上伸教授の旧蔵書を加えるなど、国内有数のロシア語図書コレクションとなる基礎となったものである。

市島が以前より実現を期していた図書館大会の関西開催が、この年五月に行なわれた。

なお、大隈や市島の助言などで、東京に新店を設けたりして改革に取組んでいた京都の老舗の大丸呉服店（社長下村正太郎、明治四〇年学苑中退）が再び経営の危機に立っていた。下村社長は大隈に助力を依頼した。大隈の意を受け、市島が衝に当たり、改革案の作成や、財界有力者を紹介するなど奔走している。関西での図書館大会の折も、京都で下

42年5月26日　掬月亭(栗林公園)　前列左から三人目市島、四人目松平頼寿

村ら関係者に会い、営業改革について相談を受けた。

五月一八日から月末まで、四国高松に赴いた。同地での校友大会に学苑を代表して参加のためであるが、もちろん時節がら募金活動を兼ねてのことであった。旧高松藩主家の松平頼寿は学苑の卒業生であり、この高松行きには、同家の所蔵する什宝類の調査という市島にとって願ってもない付録がついていた。松平はのち、市島との縁もあり、日本図書館協会の総裁に就任する。

この旅行で市島は、栗林公園、金比羅宮、屋島などの名所旧跡を巡って詳細な書き物を残し、『早稲田学報』や地元紙に掲載した。帰路大阪より乗車した汽車に、ロシアからの帰途、ベンガル湾上で客死した二葉亭四迷の遺骸が同乗していたという挿話を記している。(担当・金子宏二、酒井清、藤原秀之、渡部輝子)

人事部が本年度(一九九五年度)より実施した職員の自主的研究会の助成金交付に応募し、これを認めてもらった。文字どおり手弁当で始め、その成果を関係者のご理解を戴いてこの「紀要」に掲載の機会を得ている。学内外から一定の評価を受け、それが一同の励みとなっている。助成を機会として、新たなメンバーを加え、明治四三年分の読解に取り組んでいる。本研究会のさらなる継続と発展を期したい。――一九九五・九・九　金子記

春城日誌

明治四十二年一月一日以降

特イ4
1919
552

巳酉日誌

明治四十二年一月以降　双魚堂主人印（謙吉長寿）

翻刻『春城日誌』明治四十二年一月

一月元旦

払暁家人と共ニ起床。例之如く屠蘇の杯を挙け、新年を迎ふ。本年馬齢五十歳、吾人も漸く老境の域ニ入り、顧みれば頽然、徒爾に前稔を経過したりたるを愧つるの外なし。いつもより早く学校に至る。衆と共に賀正」(一ヱ)の交換をなさんため也。余、先登第一、暖爐未た焚きあらす。折節一天かきくもり、雪さへ降り出つ。暖炉漸く熱し、雪も晴。衆員亦集まる。即ち共ニ杯を挙げて散す。総長、学長共ニ旅行中ニ付、直ちに前島老を訪ひ、拝賀の後、田原を拉して伊予紋ニ至り、祝杯を挙く。狎妓数輩来る。相変らずの禁酒、斯る場合殊に無趣味を覚へ長坐ニ堪えず。田原と別れて家ニ帰へる。賀章四方より盛んに至る。而して未た」(一ウ)余に返礼之準備なし。斯る形式的礼儀、近年殊に懶く思ひ、又苦痛に感す。

二日

好晴。半日客之到るなく、知友、親戚へ賀章を発送す。正午より倦むて外出。高木を訪ふて、新年の買物に骨董二点を購ふ。曰く藤四郎茶入、唐物蟲の箔絵丸形漆器香合、共ニ珍品也。代価共十五円也、即納。上野松兼ニ飯し帰宅。余の談話を載」(二オ)セたる北越新報（長岡の新聞）接手。本日は終日客なし。日々来客ニ忙殺セらるゝに、

新年の閑散は、誠に誂ひ向也。在熱海の高田半峰へ「きなこ」「からすみ」を小包にて発送す。田代亮介より来書あり。白石和歌の一幅を借覧せんことをもとむ。新潟積善組合より絵はがきを贈り来る。

三日

晴。田代亮介へ白石并沢庵幅為持遣す。烏籠茶一函遣す。賀章数十」(二ウ)通を発す。半迂を招て話す。午後倦むて高木方ニ抵り、夕刻迄骨董を玩ひ、伊達政宗の書簡を購ふ。夜に入り池畔ニ英堂ニ会す。引続四方より賀章到る。

四日

雨。広田金松、印材を齎らし来る。田原栄来訪。舎弟、越後へ旅行ニ付、添書をもとむ。真島并ニ宗家店安孫子へ宛書簡を交付す。尽日家居、雑事を処す。半迂来り、自製の澄泥」(三オ)研を示す。晩間、江部淳夫、亀吉等を伴ふて来る。晩餐を共にし、深更迄雑談して別る。桂五十郎の書に接す。

五日

晴。中井敬所ニ秋室印剰の箱書を乞ふ。増子喜一郎ニ簡す。在熱海の高田半峰ニ電報を発して、熱海行申合の事を申送る。東京毎日新聞記者来って談話。即訪問記者の資格と云ふ題にて、一場の談話をなし、筆記セしむ。小倉鎮之助、相沢敏」(三ウ)太郎来訪あり。坪谷善四郎来訪、鳥谷部春汀遺書仕末の事を云々して去る。増子喜一郎来訪ニ付、土地整理の件ニ関し、佐藤伊助へ云々の紹介を依頼す。大石理円、張瑞図の幅を齎らし来り鑑定を請ふ。小柴卯之七来訪、越後鴨を贈らる。羽ヶ柳国井元三郎子息恒太郎(校友)死去に付、吊詞をおくる。菊地晩香より早稲田二十四景詩を寄セらる。」(四オ)

六日

晴。今泉雄作ニ政宗并沢庵の書幅鑑定を乞ふ。何れも正筆なりと申来る。広田金松、鶏血材二顆持参、預り置く。無聊ニ堪えず、午後より高木方ニ抵る。別ニ得る所なし。大江妻、年礼ニ来る。校友秋田徳三、島邨滝太郎紹介状を持して来る。学報記者候補者也。小兒共江部方へ招かれ、午後より行き夜に入り帰へる。北堂より年始もの来る。」(四ウ)

七日

晴。林縫之助、昆田文次郎年賀ニ来る。暫時話して去る。高木方ニ抵り沾徳并ニ訥和の点句集二冊を購ふ。沾徳の集中には、大高子葉の句三四交りあり。珍本也。夕刻より林、相沢と新富町竹葉亭ニ至り、主人珍蔵の書画を観る。抱一、光琳のもの十数点。抱一の松竹、松二幅、光琳の波瀾の金屏(二枚折)、同細もの茶碗ニ梅をえかきたる元旦試筆、乾山の鳥の図、抱一」(五オ)唐獅子の屏風など尤も佳品と見受けられたり。深更帰宅。

八日

張交屏風の張かへを始め半日を消す。敬所ニ依頼之秋室印剰之箱書出来。今朝発刊之東京毎日新聞、余の談話を載す、未完也。種彦并森羅万象亭草稿を一巻となさんと欲し、表具屋へ托す。雑客終日来り賀す。内子、全日忙殺、新年は五月蝿もの也。旧臘半迂」(五ウ)ニ嘱したる「謙吉長寿」(白文)の印成る。仿潭印佳作也。

九日

晴。山田清作来る。東京毎日ニ寄稿すべき談話を筆記セしむ。小滝淳より短冊かけ一、名家書簡壱通贈らる。高木一来る。家蔵の書画を示す。正午より英堂を訪ふて半日を消す。夜来雪あり。林縫之助ニ書を与ふ。内子年賀ニ吉田其他へ行く。加藤万作、アルバムの試刷を齎ら」(六オ)し来り示す。

十日

雪、晴。終日家居。小林堅三来る。図書館無休館主義ニ付協議す。林縫之助来訪。刊行会残務を議し、午後迄蔵書を出し、共々鑑賞す。久須美秀三郎、赤堀又次郎来訪あり。林より多田親愛、菊地三溪、みち子、竹内式部(北部石版摺)等の書簡を贈らる。」(六ウ)

十一日

朝来、名家反故を整理す。名家遺艸第二軸を作らん為也。半迂来り。近刻之印を示す。登館々員を会して事務上之打合を為す。休館日数を減縮し、一ヶ年四十六日の休館日数を開館日と改む。朝倉亀三へ沢庵手簡并ニ図書代十円送る。報知記者来訪。名流趣味欄の談話を請ふ。明後日と約す。杉山令吉、桑田正ニ書を投す。片山尚絅、相

翻刻『春城日誌』明治四十二年一月

沢敏太郎の書ニ接す。」(七オ)

十二日

朝来寒気激甚を覚ふ。成章堂栗田興功、高木弘の紹介にて来り見る。坪谷善四郎、野村寅次又踵て来る。石井(橋カ)湛山来訪。東京毎日之為談話を請ふ。貴重品登録所を文部省ニ置くの議ニ付談話す。成功記者衣笠醇来る、不遇。午後より登校、憲法祭挙行并ニ本年度基金募集ニ関し立案、多時ニ渉る。今夜、高田方法事ニ招かれゆく。小山田友清翁百五十年并ニ半峰」(七ウ)故大人の法会兼営也。友清は高田の家租、享保頃の人也。今の半峰は九代目なり。表具屋へ名家遺艸下巻一、象山建白書草稿一幅装潢依頼す。

十三日

朝来降雪あり。終日熄まず。報知記者平渡庄兵衛来り、名流叢談欄并名流消息欄ニ談話を乞ふ。即ち二時間程談話して筆記せしむ。学長を訪ふて紀元節」(八オ)設備の事、基金募集の方針等を協議し、午後三時ニ抵る。出版部ニ校外教育部を置き、余、其部長となるに決す。高田は出版部長として、専ら営業事務を督ニ当り。編輯事務并ニ今回新たに試みんとする校外巡回講演の事を併セて、余、担当之事を決す。登校事務を処す。

十四日

雨天。寒気少しくゆるむ。館員を」(八ウ)招き事務を処す。林縫之助ニ書を投す。前島男ニ書を投す。小野東洋遺著原本寄贈之事ニ就て也。学長宅ニ行き、商業講義、中学講義、国民教育三講義録、新学期開始近きにあるに依り、其の改良ニ関し協議を凝らす。余よりも四五の意見を提供し、九時より午後二時に至り、漸く決定。英堂を池畔ニ見る。」(九オ)

十五日

晴。広田金松より鶏血印材二顆、其角短冊の幅を購ふ。本間賢介、江部淳夫来訪。半迂新刻之印を示す。午後より登校、学長、幹事と紀元節の設備を協議す。黒沢治より水戸浪士の書簡を贈る旨申越す。答書を発す。佐賀県知事西村陸奥夫(校友)来校、会談す。晩間、高木弘を訪ふ。和田万吉の書ニ接す。又、佐渡ニ巡回図書館を作

るに付、深井康邦より来翰あり。」(九ウ)

十六日

早朝、二人曳の車を駆り外出。先つ越智脩吉を長与の胃腸病院ニ訪ふて慰問し、板垣伯を訪ふて紀元節の憲法演説を請ひ、慶応義塾ニ鎌田を訪ふて、徳川頼倫侯より寄付金の件を云々し、清浦奎吾を訪ふて、紀元節の憲法演説を依頼し、正午、両国総宜楼ニ英堂に会し、高木方にて骨董を弄し、晩間、長田秋濤渡欧送別会ニ臨む。会場花月」(一〇オ)楼、発起人、林田亀太郎、尾崎行雄、姉崎正治、朝比奈知泉也。相場朋厚の書ニ接す。不在中、成功記者衣笠醇来訪。

十七日

晴。半迂来る。高木方より浅ぼり堆朱の文庫を取寄セて観る。面白からさるニ付返す。黒沢治より水戸の殉難士茅根伊予之介の書簡二通贈らる。高木方ニ至り桑製金描絵茶箱壱個を購ふ。」(一〇ウ)

十八日

朝来降雪あり。足利学校遺蹟文庫へ雑書寄贈す。右ニ付相場朋厚ニ書を投す。竹越与三郎ニ書を与へて、紀元節学校へ臨席、一場の演説を為さんことをもとむ。赤堀又次郎来話。半迂ニ新玉印三顆代金十二円也渡す。午後より登校、事務を処す。紀元節ニ付、学生ニ告文を草す。大沢邦太郎の書ニ接す。直ニ答ふ。三時より清風亭ニ」(一一オ)早稲田学報編輯委員会を開き、引続き校友幹事会を開く。夜に入り降雪止み雨となる。

十九日

雪後、雨天の為道路泥濘甚し。朝来客なく、唯加藤万作来りて、アルバムの相談をなし、半迂近刻の印を示すのみ。少しく気分すぐれず、雑筆数葉をものし、倦むて登校ニ懶く、高木方ニ骨董を漁り獲る所なく、湯島切通し野田方に」(一一ウ)斑竹の文台、印材三組、まい葡萄の角盆一を購ふ。共三十一円也。此品の内、文台尤も珍らしきもの也。松兼ニ午哺し、英堂と話し、夜に入り帰宅。恒四郎、一身上之都合にて窃かに出京、不在中来訪。桑田正ニ書を投す。濁川真島より寒気見舞状来る。此頃の寒気は、田舎にも聞こえ居ると見へたり。

廿日

」（一二オ）

夜来雨あり。数日の積雪一時ニ一掃、朝来暖気を覚ふ。恒四郎来り、一身上之事を云々す。山田清作来る。小林堅三を招き、図書館会計上之事を協議す。広田金松来って骨董を見す。利休書簡一幅預る。午後より登校。書簡研究会発会之事務を処す。骨董店野田屋より火著（ママ）二双を贈らる。

二十一日

雨。山田清作来る。書簡研究会ニ講」（一二ウ）演すべき草稿を起し、半日を消す。午後より高木を訪ひ、又、坂口の病を訪ひ夜に入る迄談笑。二三の雑信ニ接す。

二十二日

晴。山田清作来る。小林堅三と図書館予算の事を協議す。朝倉亀三の来書ニ接す。午後、弘文館ニ林、相沢と会談し、刊行会印刷進行之事を協定す。林より、大雅の印を模刻したるもの二顆外印二顆を贈らる。」（一三オ）不在中、坂口五峰の書到る。書簡研究会講演の草稿筆了。夜来少しく雪ふる。

二十三日

晴。五峰より使来る。秋室印剰外、岱海堂文集等付托。加藤万作、アルバムの事ニ付来話。桑田春風来話。午後登校。一時より書簡研究会の発会式を大講堂ニ挙く。田中穂積、赤堀又、杉山令吉、巽来治郎、品川（アキ・ママ）并ニ余、講演を為す。余」（一三ウ）の講題は「情と手紙」と云ふ題也。萩野へ使を遣す。其答書を得。竹越与三郎の返書ニ接す。夕刻より英堂を訪ふ。石塚三郎より来書あり。

二十四日

晴。日曜。朝倉亀三、古刻史出版の事ニ付来訪。山田清作も同席。出版法を協議す。辻川武之進来話。対話中悪寒を感し客去る後、直ニ臥す。発熱あり、三十八度五分ニ上る。」（一四ウ）医師を招き診察を乞ふ。エンフルエンザなりと云ふ。夜に入る迄発熱のため蓐中昏々たり。夜に入り漸く熱去る。赤堀又次郎の書ニ接す。

二十五日

雨。医師来診、経過よしと云ふ。朝来熱なし。朝倉亀三より来書あり。無聊に堪へす、蓐上雑事を認む。山田よ

り三十円請取。和泉を招き学校の当用を処す。円城寺天山百日祭追悼会廿八日之案内、安田善之助より」(一四ウ)欣賞会（廿九日）の案内来る。又、赤堀又次郎の書ニ接す。今夜徹宵雨あり。終日発熱なく、病略々愈ゆ。

二十六日

小雨。中野平弥より来書あり。又、佐渡常山製湯呑を贈らる。千頭清臣よりも日報社々長となる旨の挨拶状来る。清浦奎吾の書ニ接す。学校ニ書を送りて当用を処す。桑田正ニ書を与ふ。本日病殆んと愈ゆ。然れとも蓐中に在り。林縫之助の書ニ接す。高田学」(一五オ)長、旗野蓑織来訪あり。書簡九十五通、表具屋ニ裏打を托す。余の談話、紅葉の日記に就ては手紙雑誌新年号に、旅行趣味（今昔の比較談）は旅行タイムス新年号に出て、何れも今日接手す。小滝淳ニ書を投す。

二十七日

晴。桑田春風の書ニ接す。今朝二人曳腕車にて紀元節講演を請ふため、谷干城、金子堅太郎、大石正巳、尾崎行」(一五ウ)雄を歴訪す。又、大丸呉服店主を訪ひ、林を鈴木町ニ訪ひ、午後一時、坂口を其旅宿ニ訪ふ。病未愈へす、蓐中に在り。雑談ニ刻を移し、夜に入り帰宅。島恒四郎、長田秋濤の書ニ接す。不在中、大野太衛来訪。綱(ママ)走図書館長脇屋義民の書ニ接す。

二十八日

朝来寒気甚し。果して飛雪紛々抵る。積むに至らすやむ。広田并ニ栗」(一六オ)田、骨董、書翰類を齎らし来たり見す。広田より木米製交趾ニ倣ひる(ママ)急須（共箱木米箱書、道八鑑定書あり）を購ふ。無玭(ママ)のもの。此価十五円也。山田清作来る。刊行会月末勘定の事ニ付協議す。高田学長を訪ふて校務を処す。清水銀蔵ニ会す。登校事務を処す。黒沢辰三郎来り、過日書翰研究会ニ於ける余の講話筆記を太平洋、文章世界に掲載するニ付云々す。即承諾を与ふ。午後より英堂を」(一六ウ)見る。宮川鉄次郎の書ニ接す。不在中、北条勘解由、三省堂事務員来訪あり。中里伝四郎来訪。梨果一籠を贈らる。出版部より菱湖書翰選、外近刊書一冊贈り来る。

二十九日

風あり、寒気甚し。太野大衛、子息の件ニ付来訪。太平洋記者黒沢辰三郎、過日の書簡研究会に於ける余の講演草稿を請ふ。即付与す。書翰趣味論草稿を桑田春風ニ」(一七ウ)投す。別ニ手簡添へる。静岡県阿部郡の人市川竹蔵より、名家書簡を購入セぬかとの照会ニ対し答書を与ふ。半迂来訪。登校事務を処す。栗田興功の書ニ接す、直ニ答ふ。山田清作を招き、会の月末勘定を処す。有価証券二百廿円交付す。桂秀馬の書ニ接す。おしほ品行上の事ニ付、下林、鎌田来談あり。」(一七ウ)

三十日

晴。孝明天皇祭。終日寒気激甚。山田清作、学生、鈴木堅三郎来訪。高木方を訪ふて、遠州小堀の消息一幅を購ふ。桑田春風の書到る。丹呉よりおしほ月並金五ヶ月、為替にて領掌。夕刻より富士見軒ニ校友大会を開く。八九十名出席あり。例のことく総長伯一場の演説あり。石田武亥の書ニ接す。

三十一日

晴。寒気少しく緩む。広田金松」(一八オ)より澄泥研一を購ふ。雑品を代物として遣す。又、栗田興功より水戸徳川家御庭焼楽の布袋の置物を購ふ。裏ニ後楽の落款あり。盡し義公時代のもの、無疵にて体式も佳也。珍とすべし。価五十円之内三十円也、高木弘立換払済。外ニ東湖書翰一幅を購ふ。朝倉亀三、古刻小史の事ニ付来話。午後より高木を訪ふ。池畔ニ午餐をしたゝめ、英堂ニ会す。不在中、種村宗八、」(一八ウ)黒川雲登来訪。半迂の書ニ接す。」(一九オ)

二月

一日

晴。種村宗八、山田清作、吉田半迂、三省堂の田内等来訪。犬養毅を訪ふ、不在。書をのこして去る。久米邦武を目黒に訪ふて、鍋島侯より寄付金の件ニ付内談す。又、憲法制定に関する歴史を談して去る。帰途四谷ニ飯し参校、図書館事務を見る。又、種村等と「アルバム」印刷の件を協議す。斎藤書店へ金弐十円、旧買物代の内へ払込む。不在中、お志ほ」(一九ウ)来る。在英国内ヶ崎作三郎

より来書あり。寒冒の気味にて早く臥す。江部淳夫来る。表具屋より、書翰の巻外数巻出来ニ付領掌。

二日

晴。下林貞雄、山田清作の書到る。犬養毅の書到る。坂口五峰より飯ずしを贈らる。毎日新聞より物を贈らる。相沢敏太郎、桑田正、昆田文二郎ニ簡す。登校事務を見る。栗田興功より楠木製長方卓を購ふ。種村」(二〇オ)とアルバムの事を処す。関口泰輔来訪。感冒の気味あり、早く臥す。

三日

雨。栗田興功、赤堀又二郎、山田清作、北条陰田来話。おしほを招き、行状ニ付戒飾する所あり。種村宗八ニ書を与ふ。午後より高木を訪ひ、又、英堂を訪ふて夜に入り帰宅。山田清作の書ニ接す。

四日

」(二〇ウ)

晴。感冒未愈へす。十時、下村正太郎を大丸呉服店ニ訪ふて、下村家々政并ニ営業方針ニ付密談数時間ニ渉り、余より意見を陳して勧告する所あり。午餐の饗を受け、又、洋行土産を贈らる。坂口五峰を樋口屋ニ訪ふて話す。終に晩餐を共にして夜に入り帰宅。不在中、佐藤伊三郎来訪。野口多内出京、郵書ニ接す。不在中、三輪潤太郎、朝倉亀三来訪。」(二一オ)

五日

晴。広田金松、小野通の和歌一幅を見す、乃ち購ふ。山田清作、吉田半迂来る。栗田興功、椿山遺愛の鉄餅(瓶)を齎らし来る。高田半峰来訪、大丸内政の事を云々す。午餐を与にしたる後、大丸の件ニ付大隈伯を訪ひ、後、参校事務を見る。朝倉亀三の書ニ接す。萩野由之の書ニ接す。赤堀来訪、矢野太郎を三省堂編輯局ニ推薦す。」(二一ウ)

六日

晴。大丸主人来訪、改革相談之為同伴、大隈伯を訪ふて午後ニ至るまで同邸に在り。登校事務を見る。児機病む、田代亮介来診。吉田東伍来訪。栗田興功より椿山遺愛の鉄瓶を購ふ。不在中、矢野太郎来訪。北堂、旗野健三郎、賀田妻等の書ニ接す。紀元節演説の件ニ付、竹越与三郎の書ニ接す。野口多内、夜に入り来訪。」(二二オ)

七日

晴。日曜。朝来、矢野太郎、山田清作、朝倉亀三、吉田半迂、安西蠖等交々来る。松平頼寿、下村正太郎の書ニ接す。又、ハーマンドックの動力試験ニ付、大隈伯より案内状来る。高木方を訪ふて白磁（高麗）小皿、ナタ豆形火著（ママ）六人前を購ふ。池畔ニ英堂と午餐を与にす。不在中、石井勇、越智危篤の件ニ付来訪。又、香川弥一郎来訪、物を贈らる。江部淳夫より転居を報し来る。」（二二ウ）

八日

晴。大丸主人并昇之助、同家改革の件ニ付来訪あり、書類を示さる。同伴、高田を訪ふて半日凝議す。午時登校、事務を見る。石井勇来訪、越智脩吉危篤ニ付、同人間ニ寄付金を募るの協議をなして去る。徳富蘇峰より横川和尚百人一首を模写、印刻したるもの一巻を寄セらる。盲法学士高岡清治の書ニ接す。木幡久右衛門、飯田新七、足利」（二三オ）学校、今井貫一等の来書ニ接す。浜村蔵六来訪、骨董を示して夜に入る。晩餐を饗して別る。高木骨董店へ金十五円也買物代金之内払。

九日

晴。徳富蘇峰、萩野由之ニ書を投す。赤堀又、山田清作来話。栗田より細井平州（徳民）一行ものを購ふ。価七円、即納。田代亮介紹介にて骨董屋来る。沢庵手沢の魚板を見る。」（二三ウ）午後より登校事務を見る。下村正太郎より来書あり。孔子祭準備の件ニ関し嘉納治五郎の書ニ接す。直ニ答ふ。基金管理員会を学校ニ開会。渋沢、前島両男爵出席、新講堂設立の件を協定す。大島恒次郎（神戸弁護士、大丸ニ旧縁あるもの）、大丸の事ニ付来訪。今夜大隈邸ニハーマン、ドック式動力の実験あり。招かれて到り観る。

十日

」（二四オ）

晴。伊東巳代治を永田町の邸ニ訪ふて談話、半日を消す。赤坂ニ飯し、鍋島侯爵の家令古川源太郎を訪ふて、基金寄付の事を談し、去って南葵文庫ニ斎藤勇見彦を訪ふて、徳川頼倫侯より寄付之件ニ付打合をなし、京橋辺を散策し夕刻香雪軒ニ到る。近日早稲田出身両院議員の親睦会を開かんとし、其の下相談を為す。高田、松平頼寿、松

平容大、田中唯、菊池武徳、松本恒太郎来会あり。不在中、大丸よ」(二四ウ)り数次使者来る。坂本嘉治馬の書ニ接す。黒川真道を以て博物館ニ鑑定を乞へる小野於通の一幅、真蹟と判セられたる旨申越す。又、小水麿経巻表装成る。日清生命保険会社より、株主総会を開くの通牒ニ接す。赤堀又次郎の書、寄宿舎記念会の通知書来る。

十一日

紀元節。早朝、大丸屋下村昇之助来訪。町田忠治出京之事を云々す。」(二五オ)直ニ高田ニ報して云々する所あり。広田、栗田交々来る。書翰若干通、栗田より購入。登校事務を処す。湯浅吉郎、谷干城の書ニ接す。本日午後一時より中庭ニ於て、憲法発布二十年紀念祝典を挙く。生憎式典中小雨あり、総長并ニ学長、雨中ニ立って訓示、演説あり。如斯は寧ろ学生ニ対し好教訓なりと感セられたり。式後、講堂七ヶ所ニ会場を設け、各三名乃至四名ツヽの演説者を配して講筵を開」(二五ウ)く。余第一会場(大講堂)の司会者たり。学生、熱心ニ聴聞。演説者も政府并ニ両院ニ於て学校と同様の催しあるに拘す、彼れに行かすして約のごとく早稲田へ来る。非常の好況を呈したるは、中心愉快を禁し得ざりし。落合村高田弥一郎来り、余所有の土地坪八円にて申受度ものあり。如何すべきやと問ふ。断りて遷す。島恒四郎妹、久しく下婢として使ひ置きし処、縁ありて今夜嫁に遣す。恒四郎は、二代余の」(二六オ)家に仕へたる興七の子女也。不在中、佐藤伊三郎来訪。

十二日

晴。湯浅吉三郎ニ答ふ。相沢敏太郎ニ書を投す。登校館務を見る。午後より高田同伴、大丸ニ抵り店主外、重立と会し、整理上之件ニ付協議し、薄暮帰宅。不在中、中村菊台、野口多内、本田信教等来訪あり。」(二六ウ)

十三日

晴。早朝、町田忠治を旅宿ニ訪ふて、大丸内政整理一件ニ付凝議す。下村正太郎外二人も来り会し、会談十一時ニ至って去る。高田を関口町ニ訪ふ。不在ニ付、直ちに登校。高田と町田協議の次第を談合。其の結果、大隈伯を訪ふ。伯偶々外出、面会を得す。夕刻迄学校之事を処

す。今夜、英堂ニ会す。不在中、矢野太郎、寺本婉雅来訪。島恒四郎の書ニ接す。」(二七オ)

十四日

晴。日曜。斎藤書店、山田清作の書ニ接す。早朝、上遠野富之助を木挽町の旅館に訪ふて、大丸金融之件を依頼し、大丸ニ立寄、店主、其他と会談して帰宅。小児を拉して神楽坂ニ物を購ひ、午餐を共にす。矢野太郎を三省堂編輯局へ入るゝニ付、斎藤精輔を訪ふて話す。帰宅後小閑を得て、名家書簡新購の分を整理す。夕刻より樽物町蔵多屋ニ岡山同窓」(二七ウ)会あり行く。台湾の大島長官、植村俊平、岡山家の新婿、赤松純一(医学士)外十数名来会あり。

十五日

晴。山田清作、吉田半迂、広田金松、山崎恒四郎、辻川武之進、交々来訪。辻川、草雲の大幅を齎らし来り示す。名家書翰二巻外、書翰マクリ三十余紙、表具屋へ依頼。午後登校事務を見る。夕刻より小石川坂下町、嘉納治五郎方ニ孔子祭典会の幹」(二八オ)部会ニ招かれ行く。萩野由之、三宅米吉、松本愛重、市村鑽次郎、黒木等と祭典の余興として、儒者の遺墨展覧会を開くニ付方法を協議し、晩餐の饗を受け深更家ニかへる。中村藤八、本多誠一(校友)の書ニ接す。

十六日

晴。昨日来、気候少しくゆるむ。田原より、越智脩吉、今朝八時半死去の報あり。内藤久寛父の訃ニ接す。図書館協」(二八ウ)会入会之件ニ付、佐渡深井康邦より来書あり。学校より、明朝学長同伴、飛鳥山ニ渋沢男訪問の件ニ付来書あり。高木方を訪ふて豊公遺愛の釜一ツ、交趾布袋の香合を購ふ。英堂を訪ふ。病臥中にて不遇。午後より家居、漫筆をものして半日を消す。江部淳夫来話。内藤久寛ニ吊電を発す。

十七日

晴。早朝、高田を訪ふて同伴、渋沢栄一男を飛鳥山の居ニ訪ふ。昨夜来発」(二九オ)熱、平臥中と聞き、他日を期してかへる。越地(マヽ)死去ニ付、南榎町宅を吊問す。登校事務を処す。桂湖村と話す。紫安新九郎より一身上之事ニ関

し、長簡を寄セ来る。安田善之助より世阿弥十六部集を贈らる。不在中、林十二郎、大石理円等来る。越智遺族ニ吊慰金二十円贈る。

十八日

晴、風。正太郎、昇之助(下村)、林十二郎」(二九ウ)山田清作、辻川武之進来話。野口多内の書到る。真島桂次郎より焼白魚一函を贈らる。桂湖村来訪。越智脩吉の柩を下谷七軒町忠綱寺ニ葬る。林縫之助、辻川武之進、真島桂次郎ニ書を投す。大石理円来訪あり。

十九日

朝来寒気甚し。朝餐後、坂本嘉治馬を冨山房ニ訪ひ、余の土地経営ニ関する件、落後生を博士と為す」(三〇オ)件等を協議す。昆田を古川事務所ニ訪ふて、土地経営資金の事を協議す。校用にて、早川千吉郎を三井銀行ニ訪ふ、不在。徳川頼倫侯ニ寄付を請ふの件ニ付、南葵文庫ニ斎藤勇見彦を訪ふて話す。帰路、雨ニ遇ふ。不在中、真島桂次郎より使来る。

二十日

晴。真島の使、橋本某来り、真島次男学業の事を云々す。増子ニ添書」(三〇ウ)を為持遣す。吉田半迂を招き図書館事務を処す。辻川武来訪。午後より、早川千吉郎を三井銀行ニ訪ふ、不在。林縫之助を鈴木町宅ニ訪ふて、其蔵書を見、夕刻、家ニ帰へる。小泉檀山の香魚之幅、林より購ふ。

二十一日　日曜

増子より来書あり。佐藤伊助の出京を報す。右ニ付佐藤へ書状を投し、明朝待合を約す。吉田半迂を」(三一オ)招き、書簡の整理を托す。牧野謙次郎来訪、踵て佐藤伊三郎来訪。伊左衛門死後の事を云々す。広田金松、骨董を齎らし来り示す。増子亦来る。余の土地経営ニ関し、佐藤伊助ニ相談の結果を報して去る。午前中、接客ニ忙殺セらる。三省堂より鎌倉文明史論を贈らる。客去る後、書簡を整理し時を移す。増田義一に書を投して、土地経営賛成者の状況を報す。佐藤伊助ニ簡して、明日、香」(三一ウ)雪軒ニ招宴之事を申送る。山崎垣四郎、一身上之事ニ付来話。田代亮介、児の診察之為来り、夜に入る迄骨

董談を為す。晩餐を与にして別る。

二十二日

早朝、佐藤伊助を築地金水館ニ訪ふて、土地経営ニ付資金借入之件を話し、其承諾を得。刊行会ニ立寄、事を処す。呉服町八州亭ニ午餐を喫し、早川千吉郎を三井銀行ニ訪ひ、登」(三二オ)校事務を処す。西川太治郎、三田村甚三郎、小西信八ニ書を投す。八日、桑港発、長田秋濤の来状ニ接す。今夜、佐藤伊助を香雪軒ニ招く。高田、増子并ニ余出席。安田善之助より欣賞会の通知来る。

二十三日

晴、寒気甚し。校友石田武亥、和田三夫(東亜同文会)、吉田東伍来話。広田金松より、青磁花瓶、明代詩箋譜を購ふ。午後登校、事(ママ)を見る。校」(三二ウ)友倶楽部建設調査委員ニ推挙セらる。病後の英堂を見る。

二十四日

晴。学校を往復して、二三当用を処す。午後、前田侯爵家を訪ふて、家扶高木亥三郎ニ面し基金寄付之件を話し、去って松浦伯家ニ家扶松浦健介を訪ふ、不在。帰途、高木方ニ立寄、奈良仏一を購ふ、価三十円也。晩間、富塚格治、帆足聴雨来話。今夜二水会あり、」(三三オ)行かす。

二十五日

晴。安田善之助欣賞会へ出品之珍書六点、使を以て遣す。早朝、早川千吉郎を永田町ニ訪ふ、不遇。登校事務を処す。山田清作、刊行会之件ニ付来訪。松浦伯を訪ふて伯并ニ家令松浦狷(ママ)介と寄付金の事を談じて、午時、家ニ帰へる。桂湖村来訪、近購の骨董を出し、共に賞玩す。高田弥一郎来訪。氷川神社(落合村)付近ニ田地の」(三三ウ)売りものある旨を報す。今夜、赤坂三河屋ニ早稲田出身両院議員の懇親会あり、出席す。十三、四名集会あり。

二十六日

晴。刊行会月末勘定ニ関し、林縫之助ニ書を投。帰県中の喜代四、今朝帰京。登校事務を見る。西川太治郎の答書ニ接す。坂口五峰来訪。午後、池畔ニ英堂を見、晩間家ニ帰へる。校外教育部の規程を稿し、」(三四オ)未了。

二十七日

晴。高田弥一郎へ使を遣す。加藤万作、山田清作来訪。

斎藤琳琅閣を招き、図書館勘定ニ付協議す。堀田璋左右、名古屋より出京、来訪あり。桜井秀、小杉榲村の添書を齎らし、不在中来訪。登校事務を見る。書簡研究会ニ臨む。商科生ニ一場の演説を為す。校外教育部規定、昨日に引つゝき執筆。略々稿を脱す。」(三四ウ)角田真平、学校ニ来り犬養毅を除名したる旨を報す。進歩党の内訌もここに至り極点ニ達す。林縫之助の書ニ接す。越智未亡人、謝礼之為めに来る。夜に入り田代亮介来話。

二十八日

雨。山田清作、刊行会の件ニ付来る。小児を拉して、神楽坂ニ雛人形を購ふ。富井政章来話。午後より朝倉無声、吉田半迂、富塚格治、交々来訪。半」(三五ウ)迂ニ托したる十数巻の手簡表装成る。

三月

一日

高田学長と共に、早朝渋沢男を飛鳥山邸に訪問し、有力者の標本として」(三五ウ)先つ寄付金額を定められ度旨請求す。亦大丸の窮状救済の件ニ付、依頼する所あり。高田と別れて余ハ、落合村ニ高田弥一郎を訪ふて、所有地を検分し、又、近来売りものとなりたる田地を検分す。氷川神社新築ニ付十円の寄付をなし、別ニ高田の家族ニ土産として金十円を与ふ。登校事務を見る。西河左治郎の書至る。藤樹書院より藤樹遺墨を借りたし（孔子祭典会へ陳列のため）と照会ニ」(三六オ)対し、承諾之旨申来る。曩きに図書館協会より、文部省へ建議の件ニ付、和田万吉より来書あり。

二日

雨。半迂を招き名家書簡を整理す。広田金松より堆朱軸盆を購ふ。価三十五円也、内二十五円払済。鎌田妻、江部妻来る。又、大丸主人下村正太郎来訪。午後より大丸を訪ひ、主人并昇之助」(三六ウ)を伴ふて、渋沢男爵を兜町の邸ニ訪ふて、大丸の前途ニ付談話す。下村に招かれ、浜町常盤屋ニ晩餐を共にして帰へる。吉村太蔵より、勇吾殿未亡人病気危篤の旨を報し来る。大坂の今井貫一より、今春図書館協会大会を関西に開く件ニ付云々の報あ

翻刻『春城日誌』明治四十二年三月

り。

三日

風、晴。大丸昇之助来訪。渋沢男」(三七オ)再訪之場合ニ処すべき方法を説示す。図書館協会之件ニ付、和田へ加藤を遣す。林縫之助ニ書を与ふ。学長を訪ふて大丸の件を協議す。又、校外教育部規定案を協議す。吉田半迂妻より、自製の雛人形を贈らる。午後、早川千吉郎を三井銀行ニ訪ふて、前田侯寄付之事を依頼す。十軒店ニ雛人形を購ふて帰へる。平野広の書ニ接す、直ニ答ふ。下村正太郎ニ書を投す。白眼会の件ニ付、竹村良貞ニ書を投す。」(三七ウ)

四日

晴。小西信人より、河井継之助之書簡一通を贈らる。寺本婉雅、西蔵紀行出版の件ニ付来話。山田清作、広田金松来訪。平野広より、雲井竜雄の書翰一幅を示さる。加藤万作来訪、和田館長訪問の結果を報告す。大坂西尾豊の書ニ接す。刊行会集金の件ニ関す。午後、英堂と池亭ニ会す。夕刻より降雨あり。」(三八オ)

五日

晴。和田万吉、松本忠治の書ニ接す。京都の島文次郎、湯浅吉郎ニ書を投す。又、今井貫一ニも同断。共に図書館協会の事ニ関す。斎藤書店、備前河本家旧蔵蘇氏印略を携へ来り示す。大丸の正太郎、昇之助相談の為来る。高木弘へ骨董三点返す。金三十円也、骨董代の内金遣す。高田学長ニ簡し、大丸の件を云々す。野口多内、身上の件ニ付来話。午後、刊行会ニ到り事を処す。林縫」(三八ウ)之助を訪ふて、刊行会印刷進行を督促す。今夜、学士会事務所ニ孔子祭典会展覧会ニ付、同人集会、第二回の協議を為す。今泉雄作、安井小太郎、三宅米吉、加納治五郎、萩野由之、市邨鑽次郎等来会あり。不在中、高田弥一郎来訪。

六日

小雨。山田清作、平野広、吉田半迂来訪。半迂ニ「春城居士精力所獲」之」(三九オ)文を楕円形ニ刻さんことをもとむ。大江乙亥門の来書ニ接す。外山正一十週忌辰紀念会(七日)の通知ニ接す。登校事務を見る。内藤久寛、斎藤

勇見彦ニ書を投ず。勇吾殿未亡人、去三日死去の報到る。香典十円郵送す。江部淳夫来訪。夜に入り、宮原正喬、子息学業の事ニ付来話。

七日　日曜

夜来の雨霽。朝来師友の書翰を」(三九ウ)整理す。高木骨董店より勘定書を送り来る。計算残り当方借之分三十三円五十七銭也。昆田文次郎、本田信教、坂口五峰来話。午後、高田半峰宅ニ於て、大丸之善後策ニ付相談会を開く。正太郎、昇之助、神戸の弁護士大島来会、四時間程凝議、大体の案を立つ。右は渋沢男ニ助力を乞ふための材料也。寺本婉雅ニ書を与ふ。小西信八より七福神の図を贈らる。」(四〇オ)

八日

雨。白眼会の件ニ付、前島男を訪ふ、不遇。広田金松来る。小中村博士の草稿を購ふ。本日、学校ニ於て新講堂建築の入札を執行、立会を為す。執務、午後二時ニ至る。偶々高橋義彦来訪あり。伴ふて帰宅。印話ニ時を移す。浜村蔵六も来り会し、アウンバラより嘱したる金製宝印奏功示さる。又、かねて蔵六に托し置ける呉大徴私印二顆、愈々余の手に帰す。紅霞山房中」(四〇ウ)又一珍を加ふ。高橋、浜村ニ晩餐を饗し、八時皆辞し去る。勇吾殿未亡人死去ニ付、北堂の書ニ接す。

九日

晴。坂口五峰ニ紅霞山房紀念之壱幅を為持遣し、石埭の書画を請ふ事を依頼す。桂湖邨ニ草雲の画幅を為持遣し、其鑑定を乞ふ。田代亮介ニ書を与ふ。畠山健を訪ふて話す。近刊守貞漫稿二冊を贈らる。朝吹英二を三井同族会ニ訪ふ、不遇。」(四一オ)向島逶邐錦亭ニ英堂を迎へて夜に入る迄遊び、深更家ニ帰へる。朝倉屋ニ書籍を見る。二、三の書を購ふ。

十日

朝来大雨あり。山田清作、坂口五峰、佐藤正十郎来訪。五峰ニ金三十円貸付。三輪より使来り、預り物返却。内藤久寛の答書ニ接す。午後より登校事務を見る。亦、校外教育規則ニ付属する準則案を草す。夕刻より出版部の講師」(四一ウ)招待会を富士見軒ニ開く。余も与かる。旗野

蓑織ニ書を与ふ。鳥居大路へ金弐十円相渡す。七十円之内五十円納付、尚二十円残る。これは月末納付之筈也。生命保険会社（共済）へ半ヶ年分納付す。

十一日

快晴。桂湖村来訪。宮原正猷を牧野啓吾ニ介す。半迂来り、近作の印を示す。大丸昇之助来り改革案を齎らし、渋沢男訪問之次第を報」(四二オ)告して去る。朝吹英二を三井同族会ニ訪ふて、三井家より寄付金を求むる件ニ付協議す。坂口五峰を訪ふ、不遇。午後より登校事務を処す。在韓井上雅二に書を投して、韓廷開版続文献通考壱部、同廷より早稲田へ貰らひ受けたき旨を依頼す。今夜、紅葉館に於て報知社員二十五名を招待す。箕浦勝人、三木善八、其他重立たる者のみ来る。学校の事業ニ援助を乞ハんため也。学校より高田并ニ余と」(四二ウ)幹事三名出席す。西村天囚所蔵の延徳版大学を借りて一覧す。西河太治郎より、藤樹先生贈位祭紀念帖を贈らる。勇吾殿未亡人親族、吉村太蔵より礼状来る。

十二日

雨。半迂に嘱したる仿古印壱顆奏刀。双魚堂漫録を筆す。滞京中之高橋橿堂ニ書を投す。井伊家寄付金の件ニ関し、相馬永胤を四谷ニ訪ふて」(四三オ)話す。登校、事務を処す。又、早稲田学報印刷編輯の事を処理す。

十三日

昨夜来の大雨漸く霽れて、朝より風暴る。九時半頃地震あり。広田金松来り、骨董を示す。幸田豊蔵より黄庭堅勅を奉して、績熙殿中に書せる唐韓伯庸幽蘭賦を大書セる拓本十二枚を贈らる。高橋義彦の書ニ接す。浮田和民を介して某より物茂卿の尺牘壱幅を購ふ。価十」(四三ウ)円也。午後英堂を見る。晩間帰宅。今夜十一時半頃、長時間ニ渉る激震あり。床の間の太湖石置物顚倒す。近頃稀有の地震也。

十四日　日曜

晴。樋口清策、服藤利夫来訪。踵て高橋義彦、吉田半迂来る。印書を出し示し印話ニ時を移し、午餐を与にして四時頃去る。早稲田出版部より、近刊憲法二十（ママ）週年紀念講演集を贈り来る。喜代四来る。」(四四オ)

十五日

好晴。山田清作来り、刊行会事務を云々す。松浦伯を訪ふて、寺本婉雅原稿并ニ浄写之稿合九冊交付す。亡弟妻、三郎を伴ふて来る。登校図書館事務を見る。高田弥一郎ニ書を投す。表装を托セる先哲書翰三巻并ニ幅箱三ツ出来。徂徠手簡幅代払済。

十六日

晴。小滝淳来訪、旅行タイムスの為談話を請ふ。即口授筆記セしむ。高田「(四四ウ)を訪ふて、頃日来進歩党内部之紛擾ニ付協議する所あり。新潟県代議士ニ調停を試むることを決して別る。半迂来る。手簡の整理を托す。午後、坂口五峰を樋口屋ニ訪ふて進歩党の事を論す。事情紛糾を極め、遽かに調停を容れず。五時別を告け、日比谷日本倶楽部に早稲田の同人と高橋元吉(関東都督府総督秘書館(ママ)、もと早稲田中学ニ教員たりし人)を招飲す。余と田中幹事の外、伊藤重治」(四五オ)郎、服部文四郎、来会あり。夜に入り小雨あり。終に降雪となる。

十七日

夜来の降雪積むて寸余に及ぶ。加藤万作、アルバムの件ニ付来る。山田清作ニ国書刊行会本末巻ニ載すべき事業始末を口授し、筆記セしむ。高田を訪ふて、進歩党内紛調停ニ付、昨日五峰と会談の始末を報す。箕浦勝人偶々来り、共ニ協議す。登校事を処す。高橋義彦の」(四五ウ)書ニ接す。在米巴利三郎よりリンコルン紀念絵はがきを贈らる。文求堂を訪ふて印譜を見る。終に退斎印類を購ふ。価百三十円也。

十八日

晴。大丸の両人来話、半迂又来る。和田万吉、旗野蓑織の書ニ接す。真島信城より頃日の地震の見舞を申越す。学校ニ簡して事を処す。高田弥一郎ニ書を投ず。午後より高木弘方ニ立寄、印材を購ひ、去つて英堂を」(四六オ)訪ふ。帰宅後、高橋義彦の書ニ接す。加藤万作来り、海軍省より、日露戦役中旅順ニ於て拿捕セる図書を、貰らひ受くる件ニ付、協議す。

十九日

晴。早朝、真島桂次郎、三男平三郎を伴ふて来り、物を

贈らる。吉田半迂、高橋義彦、服藤利夫等踵て来る。広田より田能村竹田自刻の楽焼茶器三点を示さる。真島子息を中学予備校へ入学セし」(四六ウ)むるに付、増子を中学ニ訪ふて其手続を為す。樋口次郎三郎より、子息学業之事ニ関し云々の依頼状来る。在留萠石沢兵吾より、同人妻の母死去の旨電報来る。直ニ吊電を発す。浜村蔵六に吳大徴印代十五円郵送す。夕刻より文求堂を訪ふて、汪啓淑印類代料百三十円之内八十円払済。同処ニ於て中村不折、川合筌盧(仙郎)ニ会し、夜に入る迄話す。今夜、機、越後安田へ向出発す。」(四七オ)

二十日

晴、後雨。西尾豊、河田熊、岡山同窓会出身四代議士等より来書あり。西尾ニ答ふ。山田清作より、刊行会顚末書の草稿を郵送し来る。江部淳夫、小林堅三、真島の使来る。学長を病床に訪ふて午後三時迄話す。昆田文二郎、真島桂次郎ニ書状を発す。

二十一日

」(四七ウ)

夜来の大雨晴。今夜、富田精策を招飲する件ニ付、昆田より返信あり。肥田野畏三郎、出京を報す。竹田刻茶器を桂湖邨へ為持遣し、其鑑定を乞ふ。服藤利夫、安西蠖、吉田亮三(赤塚改)来訪あり。廿八日、早稲田中学卒業式、廿八日、奉公会大会案内状来る。午後、富田を昆田方ニ訪ひ、真島を関根屋ニ訪ふて、長時間談話。同人次女、近日婚嫁の約成るを聞き、帯地を贈り祝を為す。明朝一番帰国の都合。」(四八オ)平三郎学資金五十円預る。夕刻より富田精策を伊予紋ニ招く。昆田も来り会す。池之端ニ印材六顆(内、大なるもの三)を購ふ、価二十円也。

二十二日

晴。琳琅閣旧借之内八十五円相払ふ。今朝湖村より、竹田茶器正品にあらすと申来る。依って広田ニ還す。西尾豊より金百五十円也、電信為替領掌。登校事務を処す。高木一来り、本居宣長自筆の「玉くしげ」を齎らし」(四八ウ)示す。機より長岡安着の報あり。在坂小林儀三郎の書状到る。浜村蔵六より来書あり。

二十三日

曇、小雨。今朝払暁、激震あり。文求堂購入印譜代の内

五十五円、学校図書館を経て相渡す。尚残金五十円未済。山田清作来り、過日口授の刊行会回顧録筆記十数紙を齎らし来る。直ニ校訂し、会の前途ニ就き緊急の協議を為す。信平」(四九オ)より歌慈和泉翁手写の主図合結説二冊を贈らる。午後英堂を訪ふ。廿九日、安田宅ニ於て欣賞会の通知あり。夜来大雨あり。

二十四日

晴。半迂来る。退斎印譜を出し内観、書翰巻表装を托す。増子喜一郎之書ニ接す、直ニ答ふ。午後、登校事務を処す。夕刻より神田淡路町多嘉羅亭ニ於て、図書館協会評議員会を開き、来五月、京都」(四九ウ)ニ於て大会を開くの件を決す。西尾豊ニ書を与ふ。

二十五日

好晴。高沢喜一郎、安西蠖、宮原正喬、山田清作、加藤万作、相踵て来る。桑田正之書ニ接す。余の談話筆記(手紙六趣味)の校正摺を郵送し来る。登校事務を見る。今夜学校幹部と校友先輩六七と、日本倶楽部ニ晩餐を与にし、新たに卒業すべき商科生并ニ政治経済科生の」(五〇オ)奉公口につき、凝議する所あり。国書刊行会第一期刊行始末書を校訂す。

二十六日

山田清作、辻川武之進、高橋義彦来話。午後より登校、事務を処す。夕刻より帝国大学山ノ上会堂ニ於て、図書館協会例会を開き、諸般の報告をなし、和漢書目録編纂規則(去廿五、六年頃編成之分)修正之為、各館より委員一」(五〇ウ)名つゝ挙るニ決す。重野安繹翁一場の講話あり、散会す。会議中降雪あり。帰宅迄積むて堆を為す。増子喜一郎の書ニ接す。

二十七日

快晴。辻川武之進ニ書を与ふ。安田善之助より、欣賞会の会日ニ付云々し来る。佐藤伊助を築地之金水館ニ訪ふ、不在。増子喜一郎、坂口仁一郎ニ書を投す。午後英堂を見る。琳」(五一オ)琅閣に魯公元次山碑法帖二冊を得(楊守敬手沢本也)。表装を托セる良寛の幅出来。早稲田アルバム、新刊ニ付其の紹介文を筆し、出版部ニ投す。本日発刊の手紙雑誌劈頭に、余か手稿ニ係る手紙六趣味と題す

る十四頁ニ渉る長篇を掲出す。西尾豊より、二百円手形入書留書状、樋口次郎三郎より、学資入書留書状到来。又木村粂市、野口多内の書ニ接す。」(五一ウ)

二十八日

晴。増子の書ニ接す。樋口次郎三郎より絽壱反贈らる。木村粂市、西尾豊、樋口次郎三郎等ニ書を投す。下村正太郎、肥田野畏三郎、朝倉亀三、的場達弥、商科学生某々、宮原正猷等交々来訪。応接ニ忙殺せらる。正午重囲を脱し、明進軒ニ佐藤伊助と会見せんとして待つ、終ニ来らず。神田辺ニ散策して帰宅。坂口并ニ佐藤伊助ニ書を投す。半迂ニ嘱し書翰(ママ)装釘九巻出」(五二オ)来。佐藤伊助より電信来る。

二十九日

朝餐前、佐藤伊助を築地の金水館ニ訪ふ。増子も来り会す。落合土地之件を話す。坂口五峰を訪ふて話す。終に浜村蔵六を向島ニ訪ふて午餐の饗を受く。凍石印壱顆を譲り受けて帰へる。帰途雨ニ遇ふ。朝倉亀三ニ書を与ふ。高橋義彦の書ニ接す。奥田雲蔵来訪。高田弥一郎ニ書状を発す。」(五二オ)

三十日

雨、後晴。山田清作来訪、五十円渡す。樋口俊太郎来る。学費十六円渡す。坪内雄蔵を訪ふて多時談話。出版部の事、演芸研究所等の事を協議し、午後二時辞して登校、事務を見る。坂口五峰来訪。夕刻より日本倶楽部に於て、小樽の上田重良、渡辺(アキ・ママ)、札幌の野原勇助を招き食会し、学校基金募集の依頼を為」(五三オ)す。学校より高田、田中、及余、出席、帰途冨山房ニ坂本嘉治馬を訪ふて帰へる。朝倉亀三の覚書を得。

三十一日

晴。山田清作、広田金松、川村亀太郎(子息隆太郎同伴)、校友白松孝太郎、久志本常幸来訪。五峰より、八官町かすみに招く旨申来る。渡辺又次郎の書ニ接す。半迂来る。午後、登校事務を処す。晩間、五峰を旅寓」(五三ウ)ニ訪ふ。終に招かれて上野常盤花壇に到る。蔵六亦来り会す。朝倉屋より月岑の日記を購ふ。不在中、高田弥一郎来訪。又、下村昇之助も来る。京都ニ図書館員大会を

開くニ付、島文次郎の書状来る。」（五四オ）

四月

一日

朝倉無声、島文次郎、増子喜一郎ニ書を投ず。大隈邸に開きたる商科学生大会ニ招かれて行く。午後英堂ニ会す。斎藤松洲、増田義一ニ書を投す。

二日

晴。早朝より林縫之助、山田清作、矢野太郎、下村昇之助、坂口仁一郎交々来訪。肥田野畏三郎、息女二人を伴ふ」（五四ウ）て来る。半古の画塾へ右長女を入門セしむるに付、添簡を付す。坂口五峰同伴、文求堂を訪ふて図書を見る。意中の書巳ニ売切り空しく去る。五峰と多嘉楽亭ニ午餐を与にして別る。寺本婉雅、斎藤松洲の書ニ接す。午後より坪内の演芸研究所資金を得るため、増田義一を実業日本社に、永富祐吉を郵船会社ニ訪ふて何れも承諾を得たり。坂本嘉治馬を富山房ニ訪ふて同一の事を」（五五オ）依頼す、未決定也。昨秋以来苦心セる早稲田アルバム印刷成り、二部贈らる。大野孝七郎より三洲印譜を贈らる。坪内ニ書を投す。夜に入り三木武次来訪、図書館へ壱百円寄付をなして去る。

三日

雨。山田清作来る。学長を訪ふて、坪内演芸研究所等の事を話す。午後より学報表紙意匠の相談の為、斎藤松洲を訪ふ。偶々加賀豊三郎坐」（五五ウ）に在り。加賀は紅葉の友人也。談話ニ刻を移し、遂ニ三人相携へて加賀宅（浅草瓦町）ニ抵り其の蔵品を見る。竹田、草坪ニ与ふる書翰十数通を集めたる一巻、殊に面白く覚へたり。借り受けてかへる。今夜加賀の案内にて深川亭ニ晩餐を与にし、深更家ニ帰へる。

四日

雨。山田清作来話。坪内逍遙、演芸研究建築（所欠）ニ付、昨今余か多分」（五六オ）の力を致したるを謝セん為来訪。半迂ニ属したる印三顆奏刀。五峰来訪、午餐を与にし、午後、同伴向島八百松に開会の随鷗吟社の大会ニ臨み、槐南の講演を聴く。席上蔵六ニ印三顆、石埭ニ壱顆、刻を嘱す。

今夜高松出身学生、卒業の予餞会あり、会長松平伯の招きに応し、富士見軒ニ抵り卒業生の為一場の演説を為す。不在中、学長来訪。渋沢男、学校ニ二万円寄付あ」(五六ウ)り。これより寄付運動漸く活気を呈せんとす。

五日

忽晴、忽雨。早朝学長を訪ふて話す。在修善寺、加賀豊三郎ニ書を投す。又、斎藤松洲ニ書を与ふ。午後英堂を見る。肥田野畏三郎、明朝満州へ出発ニ付、来つて別を告く。島田翰の書ニ接す。

六日

」(五七オ)

雨。今朝、大隈伯、学長甲州へ出発ニ付、飯田町ステーションにて見送を為す。山田清作、大塚潤三、真島平三郎、佐藤静夫来訪。真島ニ預金之内十円相渡す。半日雨窓雑筆をものす。半迂に嘱したる印奏刀。林縫之助ニ書を投す。渋沢男、森村市左衛門、各二万円つ、寄付決定ニ付、学長名義にて謝状認む。漆間民夫より、子息結婚披露案内状(十日、精養軒)来る。出席の返書出す。島文次郎より来書」(五七ウ)あり。

七日

雨晴れて烈風あり。学校基金用にて、早朝より中野武営を訪ふ。旅行不在。林縫之助を訪ふて話し、刊行会事務所ニ抵り、又、日本鉄道清算事務所ニ鈴木寅彦、早川千吉郎を三井ニ訪ふ。共ニ不在。帰宅後早川ニ書を投す。又佐藤伊助ニ郵書を発す。加賀翠溪の書ニ接す。学校ニ簡して当用を処す。午後半迂来る。相伴ふて湯島切り」(五八オ)通し辺ニ印材を購ひ、上野ニ晩餐を共にし、夜に入り帰宅。斎藤松洲の書ニ接す。

八日

風やみ天晴。内藤武八郎、霜台公銅像を春日山ニ建設する件ニ付来話、前島男ニ紹介す。安西蠖来る。高木弘を訪ふて骨董を見、上野公園ニ桜花を見、終ニ英堂ニ会し、夜に入り帰宅。斎藤松洲より来書あり。又、内藤久寛の書ニ接す。」(五八ウ)

九日

早朝、校用にて岡崎正也を麻布本村の居に訪ふて、基金の事を話し、其珍蔵の画幅を見る。清浦奎吾、渡辺嘉一

を訪ふ、不在。南葵文庫ニ斎藤を訪ひ、紀州邸に岸家令を訪ひ、日本鉄道清算事務所ニ鈴木寅彦を訪ふて、鍋町風月堂ニ飯す。偶々岡崎正也来り午餐を与にす。午後より登校、学長と基金事務の打合を為す。不在」(五九オ)中丹呉翁来訪。西尾豊の書ニ接す。増子喜一郎、内藤武八郎来話、晩餐。内藤久寛を下宮比町の別邸ニ訪ふて、余の土地経営の事を談して金千円出金を諾す。

十日

晴、風。朝来、斎藤松洲、吉田半迂、佐渡の真木山豊治、肥田野息女、山田清作、真島平三郎、河野通章交々来話、応接ニ忙殺セらる。午後より登校、事務を処す。服藤利夫、江部」(五九ウ)淳夫来る。今夜、漆間民夫子息結婚披露に招かれ、精養軒へゆく。和泉信平、今夜、余の家ニ結婚を為す。妻は、埼玉県来間謙次郎長女イシ(二十四才)なり。

十一日

晴、風。桑田春風、辻川武之進、広田金松、朝倉亀三、内藤久寛、吉田半迂来訪。坂口五峰、高橋義彦(金子入)、会津八一の書ニ接す。佐藤伊助へ千五百円借用証入書留書状を発す。」(六〇オ)内藤武八郎来訪、応接之為午前忙殺。午後より梶田半吉を訪ふて話す。牧野静斎を訪ふ、不在。坪内逍遙を訪ふて夕景迄話して帰へる。内藤久寛より来書あり。行違に証書入書状、内藤へ人を以って返付。下村昇之助之書ニ接す。前田仁太郎の書ニ接す。住吉家写、釈教三十六歌仙絵巻一巻を購ふ。価七円也。内藤久寛より物を贈らる。朝倉亀三に百万塔を譲与す。交換に蜀山人自筆一話一言一冊取る。」(六〇ウ)今夜、吉熊楼ニ学校の春季職員慰労会あり出席す。

十二日

晴。高橋義彦、服藤利夫、斎藤松洲ニ書を投す。大丸の下村正太郎、昇之助、大島、改革相談のため来話。登校事務を処す。学長と共に大隈伯を訪ふて府下富豪を招き、寄付勧誘を為すの件を協議す。帰宅後丹呉翁来訪。亡弟未亡人、身上の事を協議して去る。朝倉」(六一オ)亀三を訪ふ。三升屋二三治の遺什一を贈らる。文求堂に立寄り、退斎印類代金残額五十円払、これにて代金完済。又、集

古印存（高橋義彦分）の代価百八十円之内五十円相渡す。英堂に会し、十時帰宅。水谷弓彦の書ニ接す。半迂に嘱したる書翰用印（如瓶）奏刀。

十三日

晴。早朝校用にて飛鳥山ニ渋沢男を訪問す。用済の上、飛鳥山の桜花」(六一ウ)を観、直ちに帰途ニ就く。途次高田を訪ふ。偶々下村正太郎等高田方ニ在り、同家改革之件ニ付協議。十二時ニ至り辞して前島男を訪ひ、白眼会の事を協議し、登校事務を処す。高田同伴、大橋新太郎を博文館ニ訪ひ、寄付金之件其他を協議す。今夜、建築学修業之為、学校より洋行を命したる佐藤功一の為、日本倶楽部に送別会を開く。余も亦与かる。石塚三郎の書ニ接す。」(六二オ)

十四日

晴、夜に入り雨。山田清作来話。中野武営を訪ふて、学校の要件を話す。坂本を冨山房ニ訪ふ、不在。高木骨董店に立寄。午時、登校事を観る。早稲田学報編輯会ニ臨む。大隈伯ニ面して校用を云々し、夕刻より読売の旧同人、高田方ニ会し、越智脩吉死後の事ニ付協議し、十時散会。斎藤松洲の書ニ接す。不在中、並木覚太郎、中村久四郎来訪あ」(六二ウ)り。渋沢男の書ニ接す。清国人劉崇傑妻の訃に接す。長女之一身を托しある賀田直治、和泉文三（共に台湾にあり）両人より同人結婚の事ニ関し来状あり。勝浦鞆雄の書ニ接す。

十五日

払暁より大雨あり。今朝、吉田半迂、山田清作来る。白眼会第二回通知状を発す。水谷弓彦、中村久四郎、西河太治郎、桂湖村」(六三オ)、勝浦鞆雄ニ書を与ふ。島文次郎の書ニ接す。午後より登校事務を見る。斎藤勇美彦、斎藤松洲ニ書を投す。在伊勢石塚三郎より返信あり。丹呉翁に早稲田のアルバムを贈る。

十六日

晴。山田清作の書ニ接す。松平頼寿伯を訪ふ、不在。冨山房ニ坂本を訪ふて、坪内の沙翁著訳を早稲出版部（ママ・田脱）と冨山房と共同出版を為すことにつき」(六三ウ)協議す。村口書店を過き、西清古鑑外二三の朝鮮本を購ふ。多嘉羅亭ニ

飯し、午後より日比谷図書館ニ図書館協会の委員会を開き、和漢図書目録編纂法を審議し未た結了に至らず。不在中丹呉翁来訪。東京植物学会より、小野蘭山百年紀念会案内状来る。高田弥一郎来訪あり。堀江某来り中尊寺仏壱体を示す。今泉雄作宛添書を与ふ。高橋義彦再上京を報す。夜」(六四オ)ニ入り梶田半古来訪あり。

十七日

晴。山田清作、広田金松来る。広田より雄誉上人の消息を購ふ。大丸主人、渋沢男より財政整理のため、梅浦精一を推薦されたりとて報告の為め来る。梅浦、不適任なるを以て大丸困却、大隈伯と協議することを約して別る。登校事を見る。静浦(ママ・勝)鞆雄来館、余集むる所の書翰を見んことを望む。乃ち」(六四ウ)図書館に延へて十数巻を出し示す。蓋し此人余と趣味を同ふする也。佐藤伊助、賀田直治、下村正太郎、土子金四郎ニ書を投す。野田屋を訪ふて一二の骨董を購ふ。斎藤松洲を訪ふ、不遇。池畔に英堂を見る。帰宅後家人報す、大丸主人再三来り訪ふと。千葉鉱蔵ニ書を投す。

十八日

晴。日曜。下村正太郎来話。高橋」(六五オ)義彦、子息を伴ふて来る。林縫之助来る。絵半切標本を贈らる。斎藤勇見彦、松平頼寿伯の書ニ接す。校友伊藤明基来訪。児等を拉して神楽坂ニ物を購ふ。午後よ前島(ママ・り脱)男邸ニ白眼会の園遊会を開く。此度は男爵の饗応也。林縫之助の書ニ接す。不在中、寺本婉雅来訪。

十九日

晴。大野太衛、赤堀又次郎、吉田半」(六五ウ)迂来訪。一茶同好会々主中村六郎、一茶の遺墨を携へ来り示す。絵はかき等を贈らる。斎藤松洲より、学報表紙意匠図案を贈り来る。午後参校事務を見る。勝浦鞆雄来訪、水戸小宮山楓軒の長簡(烈公加筆)を贈らる。余より鳩巣の一簡を贈って謝を為す。学報意匠の件ニ付、松洲を訪ふて話す。夜来暴風雨あり。下林の書ニ接す」(六六オ)。

廿日

雨風罷む。牧野謙次郎、勝浦鞆雄ニ書を投す。京都島文次郎宛、図書館協会大会用四十円也、為替にて発送す。

内藤久寛を訪ふて、土地経営ニ関する借入金壱千円領掌。下村正太郎、高橋義彦、石塚三郎、吉田東伍、帆足聴雨、山田清作交々来る。石塚と午餐を与にして別る。午後登校事務を処す。増田藤之助と和英字書編纂進行上之交渉を為す。斎藤松洲より学報表題意匠」(六六ウ)を送り来る。晩景、亡弟未亡人、下林貞雄、鎌田来る。未亡人将来の件ニ付協議す。下村正太郎ニ書を投ず。半迂に張りつけを托したる百漢碑壱帖出来。牧野静斎来話。今夜、昂、石塚三郎同伴、長岡へ向け出発。脚気治療之旅行也。朝倉亀三、太田為三郎の書到る。

廿一日

晴。桂湖村、牧野静斎、中村六郎、広田金松交々来訪。内藤久寛」(六七オ)、斎藤松洲、中村久四郎ニ簡す。萩野由之より来書あり、直ニ答ふ。松平頼寿伯を朝倉病院ニ訪ひ、讃岐高松へ同伴の事ニ付打合を為す。松洲を訪ふ、不在。桂園竹譜を同人ニ貸付す。上野ニ飯して英堂を見る。登校事を処す。安田善次郎より、学校へ壱万円寄付の申込あり。勝浦鞆雄より、伴信友の細字墨蹟を贈らる。土子金四郎の書ニ接す。永坂石埭ニ書を与へて、学報表題の揮毫を乞ふ。内藤久寛より依」(六七ウ)頼を受けたる日本石油会社紀念式辞草稿、牧野静斎の加筆を乞ふて内藤へ回送す。

廿二日

晴。吉田半迂を永坂石埭へ遣し、学報表題の揮毫を乞ふ。石埭ニ嘱したる印刻成。五峰、蔵六ニ書を投す。登校事務を処す。増子喜一郎、広井一ニ書を投す。夕刻より基金募集の件ニ付、大隈邸に重なる実業家を招待す。来会者」(六八オ)

服部金太郎、大橋新太郎、根津嘉一郎、佐竹作太郎、小寺謙吉、川崎金三郎代人、日比谷平左衛門、野沢源次郎、小野金六、田村利七の十一(ママ)名の外、主人側にては渋沢、森村、小野、増田并ニ学校幹部にて会食後伯の演説ニつき学長の説明あり。渋沢男より懇切の勧誘をなし、即座応募額を決する事となり大橋、根津壱万円(ママ)ツ脱)、服部、日比谷五千円ツヽ、佐竹、田村二

千五百円」(六八ウ)ツ、、山中一千円即座ニ決定す。先づ上結果也。大橋を基金管理員ニ推し、十時散会す。林縫之助、中村久四郎、西河太治郎の書ニ接す。

廿三日

雨。山田清作来話。坪内之為、永富雄吉を郵船会社ニ訪ふて、演芸研究所寄付金の事を話す。昆田を訪ひ、又、岡田文部次官を文部省ニ訪ふて、関西に於ける図書館協会大会の件を云々す。午後より登校」(六九オ)事を見る。昨夜寄付を受けたる人の返礼廻りに出づ。大橋新太郎を博文館に、日比谷平左衛門を堀留に、根津嘉一郎を青山南町に訪ふて夕刻帰宅。増子喜一郎の書ニ接す。不在中、浜村蔵六来訪あり。今日、日比谷図書館に図書館協会目録編纂に関する委員会あり、欠席す。

廿四日

晴。佐藤伊助ニ電報を発し、金件を」(六九ウ)照会す。大丸の三人来る。同伴、高田を訪ふて改革方法を協議し、十二時ニ至りて別る。神田に午哺し、湯島の野田屋を訪ふて面箱、茶箱等を購ふ。お茶の水高等師範学校内に開ける孔子祭典会展覧会の委員会ニ臨み、五時迄明日之準備協議ニ参し、夕刻より清風亭ニ開会セる出版部編輯会議ニ列し、十時帰宅。寺島元重来訪。上田重良の書ニ接す」(七〇オ)。

廿五日

晴。山田清作来る。例の大丸三人相談之為来る。明朝、渋沢男同訪を約す。越佐会幹事、来月開会之打合をなして去る。聖堂ニ開会セる孔子祭典会ニ臨む。又、余自身も多少の労を取りたる先哲遺墨陳列を観る。池畔ニ午哺し英堂と会す。今夜檜物町「やまと」方に林縫之助と会見、弘文館の事、刊行会の事を協議す。西尾豊の書ニ接す」(七〇ウ)。

廿六日

晴。早朝渋沢男を飛鳥山の邸に訪ふて、下村改革の事を云々す。伊藤基明(校友)、一身上之事ニ付来訪。吉田半迂妻、西京より帰へり物を贈らる。佐藤伊助、高田弥一郎ニ書を与ふ。登校事を処す。樋口次郎三郎より為替入書状を領す。和田万吉より来書あり。

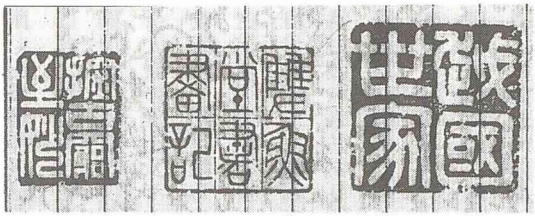
廿七日

晴。和田万吉ニ答ふ。越佐会幹事」(七一オ)来る。吉田半迂、加藤万作、山田清作、高橋義彦来話。高橋同行、上野伊与紋方に浜村蔵六を招く。偶々並河澹如も来り会す。蔵六に嘱したる印三顆奏刀。澹如、近く清国より携へ来る所の書画中より、高旭晴嵐之瑞兆図一幅の割愛を請ふ。価三十円、直ニ相渡。帰宅後和」(七一ウ)田万吉の答書を得。

高旭晴嵐、明万暦年末の人。小伝、佩文斎書画譜中にあり。幅壱尺、竪四尺の小幅にて、雪中山中の草廬読書之図にて、草廬近く梅樹雪を冠むる処筆致凡ならす。点苔極めて妙、蓋し名品なり。落款に云く、

瑞兆図

蔚亭



尭章　二道兄先生佑欽　晴嵐第旭画意

□□」(七二オ)

蔵六、此幅を見て垂涎措かす。終に余の為めに情を枉く。多とすべし。

桑田豊蔵来訪。同人来月より学報主任となるにつき、紙面上の打合を為す。越佐会幹事来る。

廿八日

晴。文求堂ニ購入図書代払。昆田、和田ニ書を与ふ。山田清作来る。月末勘定を為す。菊池晋二を訪ふ、不遇。梅浦精一を木挽町ニ訪ふて、学校基金寄付の件、大丸の件を話す。午時、英堂ニ会す。赤堀より、弘文館の危急」(七二ウ)を内報し来る。山田清作へ使を出し来訪をもとむ。高田俊雄、種村宗八出版部の件ニ付来話。山田清作をして林縫之助を訪ハしむ。島文二郎の書到る。

念九日

晴。山田清作来訪、踵て下村昇之助来る。高田を訪ふて、京都行ニ付打合を為す。登校事を見る。中学の評議員会

ニ臨み予算、決算を見る。井上辰九郎を訪ふて話す。文晁并風外」(七三オ)の画幅を譲り受く。価三十円也。二時帰宅。行李をとゝのひ、六時、和田万吉と共ニ京都へ向急行汽車にて発す。

三十日

曇。七時京都ニ着。下村正太郎外下村の家人両三人停車場ニ出て迎ふ。下邨案内にて、麩屋町沢文方ニ投す。此地冷気甚し。綿服一枚にて凌き兼ぬるほど也。今日は、町田忠治を大坂に訪ふ予定なりし処、同人不在と聞き、大坂行を見合す。十一時より下村正太郎に招」(七三ウ)かれ烏丸の邸ニ抵る。主人余のために百余の画幅を出し示さる。午餐後、主人案内にて大丸の仕入店、小売店并ニ新築予定地を巡視し、再ひ下村家ニ抵り、同家営業改革の件を協議す。大島も神戸より来り、此議ニ参す。晩餐の饗を受け帰宿す。島文二郎、湯浅吉郎来訪。明日以後会の状況を報して去る。

五月

一日

早朝起、紀行を筆す。菊池大学総長を訪ふて、本日の大会ニ出席を乞ふて、大会に臨む。会場、新設京都図書館也。会するもの八十余名、遠く韓国、秋田、山形、四国、九州等よりも来会者あり。九時半開会。余、先つ開会之挨拶をなし、大森府知事の演説あり。余、又一場の演説をなし、次て和田万吉の演説あり。午時、大極殿の門前に整列して、紀念撮影をなし、午後より又開会、午前に引つゝき太田為三郎、島文二郎、赤」(七四ウ)堀又次郎順次演説し、最後に菊池大学総長の演説あり会を閉づ。館内に旧書の陳列あり、閉会後観覧す。尤物少からす。詳細、双魚堂漫録に載す。散会後、帰宿。石塚三郎より、機、肺患漸々進行の事を云々す。一読痛心にたへす。吉田半迂、山田清作、在韓井上雅二の書ニ接す。今夜、祇園中村楼ニ於て、来会者の懇親会を開く。

二日

」(七五オ)

好晴。大坂より、紫安新九郎来訪あり。伊藤正ニ書を投して、送金を托す。今朝九時、衆と共に予定之通り先つ

智恩院ニ至り、其蔵書を見、更らに東福寺を訪ふて、五山版其他之図書を展観し、精進料理の饗を受け、午後より東寺を訪ふて、勧智院ニ古文書并ニ宝什を展覧し、三時過帰途ニ就く。途次、竹泉を五条坂ニ訪ふて、木翁の遺型を以て作りたる青磁の香炉を購ふ。竹泉近来の傑作也。昆田文」(七五ウ)次郎より余か土地経営ニ関し、賀田金三郎ニ交渉の顚末を報告し来る。賀田、快諾之趣也。又、英堂の書到る。数通の絵はがきを宅并ニ知友に発す。吉田半迂より、近刻の印蛻を送らる。今夜、鳥本に和田と共ニ湯浅、島、今井を招飲す。

三日

晴。数通の絵はかきを知友ニ発す。藤原忠一郎を訪ふて話す。下村正太郎来」(七六オ)訪。本日図書館団体一行と共ニ奈良、宇治へ赴く予定之処、用の都合にて見合、下村と共ニ大坂へ赴く事となり、午餐後大坂ニ向ふ。着坂の上、直ちに大丸ニ抵り其の楼上ニ休憩し、同家の為、町田忠治を訪ふて話す。明朝再訪を約して去る。鹿田静七を過き、其の珍蔵の兼葭堂日誌五冊を見る。絵師草紙外一巻の絵巻物写を購ふ。花屋ニ投す。下村来訪あり。招かれて槌田ニ晩餐の饗を受く。大島并ニ大坂大丸店支配人南某同席す。」(七六ウ)帰寓後、新井智三郎、福田嘉三郎来話。

四日

小雨。小閑を偷むて、紀行を作る。新井智三郎来訪。下村連中と共ニ、町田忠治を博労町ニ訪ふて、十二時迄協議をなし、帰途住友銀行ニ西尾豊を訪ふ、不在。帰寓後、西尾豊来話。小川為次郎又来訪。踵て下村正太郎来る。小川より天平写経を示さる。多治見久太郎ニ書を投して、定武楼印纍の」(七七オ)事を云々す。今夜京都ニ帰へることを見合せ、小川ニ招かれ浪華亭ニ晩餐を共にす。同伴花屋へ帰へり、深更迄図書談をなして別る。

五日

小雨。今朝、七時四十五分発汽車にて大坂を発し、京都ニ帰へる。東京より転送せる数通の書状(内藤久寛、井上雅二、真木山孟治、広井一)ニ接す。学校より電信為替到来。帰着後間もなく下村より使来る。踵て主人来り、

余を小」（七七ウ）松谷の別業ニ招く。即ち共に抵る。主人、懇遇到らさるなし。亭樹庭園、京都に於ても多く見るを得可らさるの風流を極む。雨中なから庭園に立って撮影の材料となる。一時頃去て、瓢亭ニ午餐の饗を受け、四時帰寓。下村より使来り。余に蕪村の幅を贈らる。過日書画展観の際、余の特に賞したる山樵伐木之図也。福田嘉三郎来訪。福田と晩餐をともにし、八時二十分の急行に帰東の途ニ就く。下村主従、藤原忠一郎、」（七八オ）福田等停車場迄見送りに来る。

六日

雨。九時無事新橋着、直ちに帰宅。不在中之雑簡を検閲す。登校事務を見る。硯友社紀念会ニ、小波より演説を依頼さる。承諾の旨を答ふ。小川為次郎ニ書を与ふ。今夜、築地ニ某亭ニ井上辰九郎の洋行を送る別宴あり。発起人なれとも疲労の為行かす。夜来大雨あり。」（七八ウ）

七日

早朝より不在中の雑事を処す。林縫之助、増子喜一郎、内藤久寛ニ書を投す。吉田半迂来訪。十時より二人曳人車を叱咤して、昆田文次郎、増田義一を訪ふて話す。菊池晋二を訪ふ、不遇。更らに、日比谷平左衛門を高縄の邸ニ訪ふて話す。帰途、英堂を見る。中野武営、小川為次郎、鈴木寅彦に書を与ふ。朝倉亀三、下林貞雄、山田清作等」（七九オ）の来書ニ接す。山田、麻疹にかゝりたる趣報あり。沢本与一、新潟新聞一万号ニ投稿の件ニ付来訪。越佐会幹事の書ニ接す。

八日

晴。沢本与一、新潟新聞社壱万号寄稿の件ニ付再ひ来る。林縫之助来訪、刊行会の事を話す。登校事務を見る。午後、紅葉館ニ開会セる、硯友社廿五周年紀念会ニ臨み、紅葉山人の事ニ関し」（七九ウ）一場の談話を試む。六時より、富士見楼ニ開会之越佐会ニ臨み、本年卒業すべき学生ニ対し、一場の訓示演説を為す。中野平弥より琢斎製銅器を贈らる。

九日

晴。山田清作の書ニ接す。林縫之助ニ書を与ふ。馬瀬忠松、小柴夘之七来訪。肥田野畏三郎の書ニ接す。旅順案

内を贈らる。直治女子出生ニ付、縮緬一」(八〇オ)反、祝として郵送す。京坂の島、湯浅、今井ニ過般之礼状を発す。朝倉亀三、桂五十郎来話。午餐後去る。おしほ、下林、鎌田来訪。亡弟遺族将来の事を協議す。

十日

曇。志喜玖盛、伊藤基明、桑田豊蔵（以上校友）来訪。加藤万作夫婦、京坂より帰へり、物を贈らる。機、帰京之事に関し、石塚三郎ニ長電を発す。下村正太郎来訪。松平頼寿伯を訪ふて、」(八〇ウ)讃岐行の打合を為す。菊池晋二を東海銀行ニ訪ふ、不在。林縫之助之書に接す。午時、英堂に会す。登校事務を見る。安田恭吾を訪ふて、布流谷石の置物、定家箱を購ふ。機病状ニ付、石塚より再応来信あり。昆田文次郎来訪。今夜、十時過之汽車にて長岡へ行(ママ)け出発す。

十一日

晴。十二時過、長岡ニ着。石塚ニ迎へられ、直ちに同人宅ニ抵り、機の病を問」(八一オ)ふ。午前熱発あれとも、衰弱意外に甚しからず。明日召つれ帰京と決し、午後三時の汽車にて新潟ニ赴き、篠田方ニ投じ、栗林貞吉を招き余の土地経営ニ関し出資を依頼す。大体承諾を得たり。但し、出資の時はおくれるとの挨拶あり。山田穀城を招き、新潟新聞壱万号之為一場の懐旧談をなし筆記せしむ。疲労甚しく直ちに臥す。

十二日

小雨。今朝五時五十分発長岡へもとる。長岡病院長を訪ふて、機の病状を聞き、長尾写真館ニ撮影す。新潟新聞壱万号ニ掲載せん料也。広井一来話。東京ニ発電、今日二時帰京之事を報ず。大里伝十郎より、越後雪中の履物（カンジキ、藁履、ツマかけ）標本を贈らる。二時の汽車にて長岡を発す。偶々大里伝四郎出京ニ会し同車す。渡辺三左衛門、車中にあり。一等室内四人皆相識にて、東京迄他客を交へす」(八二オ)万事都合よし。病人異状なく。(ママ)

十三日

今朝五時半、上野ニ着す。不在中、小川為次郎より為替入来書あり。石川年足の大般若経、小川ニ譲る。右ニ付三百七十五円代金受取。真島二女のり、中頸城郡美守(ヒダモリ)村

富永孝太郎相続人忠司へ婚約整ひたりとて、富永家より之音物を贈らる。和田万吉の書ニ接す。小川、石塚、真島ニ書を投す。下村正太郎来訪。」(八二ウ)登校事務を処す。紫安新九郎、大坂の南区長ニ選任ニ付、内状を報じ来る。京都の藤原忠一郎より来書あり。又、福島県白河町大原武雄、村越慶三より、同町図書館を当分町役場ニ置く旨を報じ来る。赤堀又次郎、内藤久寛来話。

十四日

雨。和田万吉、福田嘉三郎、栗林貞吉ニ書を投す。栗林ニアルバムを送る。校用にて、早朝、大橋新太郎を訪ふ。第三銀行ニ小川」(八三オ)送金請取。昆田を訪ふて話す。湯島野田屋方ニ明代蒔絵香合を購ふ。池畔ニ英堂ニ会す。不在中、朝倉無声来訪。菊池晋二、水谷弓彦の書ニ接す。大坂東成郡平野郷村多治見春谷より、定武楼印纍を贈らる。本日、橋本圭三郎を招き、機を診察セしむ。肺患にて、右肺殊によろしからす、安静を可とす、他へ移す可らすと。武藤喜一、図書館を辞するに付来訪、物を贈らる。尽日雨晴れず。」(八三ウ)

十五日

雨降りつゝく。水谷へ百円(三百円之内)、増田へ百円(二百円之内)為持遣す。多治見春谷へ印譜の礼を申送る。讃岐行ニ付、中野武営を訪ひ添書を受く。吉田半迂来る。高野大師図巻の改装を托す。朝倉無声の書ニ接す。登校、藤原忠一郎、徳川頼倫家令の書ニ接す。松平頼寿伯来校、讃岐行の打合を為す。午後より学報の編輯会を開く。野田屋」(八四オ)骨董店ニ網代製中蒔絵手箱を購ふ。

十六日

雨ふりつゝく。今朝、松平頼寿伯、讃岐へ出発ニ付、八時新橋迄見送りを為す。下村大丸店ニ立寄り、社長と会談の末、菊池晋二を桜川町肛門病院ニ訪ふて、大丸のために談示を為す。弘文館ニ林を訪ふ、不在。午後、橋本左武郎、児のため来診あり。林縫之助、山」(八四ウ)田清作来話。松井郡治、内藤久寛、小川為次郎の書ニ接す。下村正太郎、田原栄来話。

十七日

雨霽。丸山新十郎より、高田新聞八千号に投稿を依頼し

来る。早朝、高田を訪ふて、高松行ニ付協議す。登校、出版部員と出版の件ニ付協議す。お志保身上之事ニ付、丹呉翁ニ書を投す。佐藤伊助ニ書を与ふ。又、賀田宛土地経営ニ関する一千円」(八五オ)証書同封の書状を、昆田文二郎ニ与ふ。正午、坪内を訪ふて、夏期講習会に講話をもとむ。出版部の依頼に依り代弁する也。其承諾を得て出版部に報す。帰宅の上行季を調ふ。賀加(ママ)翠渓、石塚三郎の書ニ接す。六時三十分の西行急行汽車にて発す。家児、校員別を送る。

十八日

晴。午前三時二十分、名古屋ニ着。松平頼寿伯乗り込む。此行松平伯」(八五ウ)の高松に帰へるを機とし、同行を約したるなり。京都より下村正太郎乗り込む。同乗、神戸三宮ニ到って下車す。于時九時、直ちに松平伯と海岸通蓬莱舎ニ投す。下村、大島并ニ神戸大丸支店長来訪あり。午時喫飯後、別府丸ニ投す。二時解纜、此船七百五十噸、大坂商船会社の新造船也。船中松平伯と余の外、高松より伯と余を出迎に来れるもの両三輩あり。航海六時間、談笑時の移るを覚へず。漸く小豆島眼界に入るに」(八六オ)迫むて、皆な船室を出て甲板に起って馳眺す。左右の人、余の為めに目前の風光を指点して曰く。小豆島は寒霞渓のある所也。彼の五剣の叢立するは、五剣山と云ふ。其麓に栗山生る。五剣山は、一名八栗山と云ふ。栗山の号、これより出づ。曰く、家の水中に没して、唯た屋上のみを見るかことき島は、屋島也。其の辺の海か即壇の浦也。屋島よりも遠くして、湾をなし居る所は志度湾也。平賀鳩渓の在所なりと。賞覧尽きさる内、船は」(八六ウ)愈々進むて、高松城眼界に入り来る。急ニ船室ニ入りて、行李を整理し、七時三十分高松の桟橋ニ着す。多数の人に迎へられ上陸。余は、可祝旅館ニ投す。今日同船の人ニ校友二人あり。曰く前橋孝義、曰く菊池(アキ・ママ)麿。着後、前橋外三四の校友来訪あり。鈴木市長、教育会副会長岡内清太来訪あり。前橋と明日以後遊覧の日程を議して、十時寝ニ就く。此地蚊多く、本月上旬より既に蚊帳を用ゆ。十月頃迄、撤する能ハず」(八七オ)と云ふ。

十九日

晴。今朝七時発汽車にて、琴平神社を拝せんとて、旅館主人を東道とし、前橋、菊池、吉田（益栄）と共に発す。西法寺公園を車窓より望み、東郷川を渡り鬼無、国府、坂出、宇多津、丸亀、多度津、金倉寺、全通寺の諸駅を経、十二三里の処二時間余を費して琴平に達す。直ちに乕屋旅館に投す。旅館中の旧家也。」（八七ウ）主人、骨董趣味あり、陳列館を営み、其の蔵品を陳列し客に見せしむ、一覧す。それより琴平を拝せんとて、石磴を登る。本殿迄八九町程もあらん。石造の雲梯八九町を攀るは、なか〳〵困難にて、いたく疲憊を覚ふ。社務所に刺を通して、国宝ニ登録されある書院の応挙大作を観る。鶴の図、乕の図、竹林七賢之図、皆目を驚かすに足るもの。就中、床の壁画、滝をものしたるもの、尤も傑作と覚へたり。七賢の顔に墨を」（八八オ）塗抹したるものあり。爾後室内に人を容れず。網を各室に張り、廊下より見せしむ。余は、幸に室に入りて見ることを許されたり。七賢の顔は、墨を洗滌し、玉章をして修補セしめたる由にて、今は墨痕を留めず。岸岱の画きたる柳に鷺も、なか〳〵の見物也。牡若の間に茶菓の饗を受け、庭園に出てゝ試みに馳眺するに、限りなき平野を隔てゝ、飯山正面に屹立し、風光得も云ハれず。社務所を辞し、又、石磴を拾ふて本殿に進み、一」（八八ウ）拝の後、宝物館ニ宝什を見る。琴平神社は、俗衆の崇拝する所、其境内は、俗気紛々として見るべきものなし。但た石磴其他の規模は、流石に雄大にて、四国の風光の佳なる、他の俗処の及ぶ所にあらす。乕屋ニかへる。午哺す。公益会の主幹、秋山為二来り、余に琴平繁栄策を問ふ。即ち咄嗟案する所の一二を話して別る。二時四十分の汽車に投じ、五時近く高松にかへる。今日暑気甚しく、殊に疲労を覚ふ。一浴の後、散髪し漸く快を覚ふ。」（八九オ）松平伯より、廿三日公会堂に招飲の案内来る。校友中村祐吉（県会議員）来話。東京ニ郵書を発す。

廿日

晴。早朝より松平家の依頼ニ依り、城内事務所ニ出張し、其の蔵書の取調を為す。点検数百点、終に蔵庫の内に入り検索す。古版部類、意外ニ少なく、僅かに五山版東坡

詩集二十五冊を発見したるのみ。珍とすへきハ、藩の編纂に係る列朝要紀二」(八九ウ)十三冊、歴代藩主の事歴を輯めたる讃城実録数百冊、藩臣の伝を編纂したる諸家登仕録等なり。午時、松平伯爵来訪、祖廟の前に新築セる第舎ニ至り、午餐を共にす。飯後祖廟を拝す。伯爵特ニ扉を排して、祖像を拝することを許さる。本像は、等身の坐像にて陶製なり。藩祖自から古理平を城内に延き、作らしめたる処也と云ふ。もと仏生山の廟所にありしを、遷坐セし也と。拝後事務所ニもど」(九〇オ)り、引続き調査す。伯爵、余のために宝什数点を示さる。中に信玄自筆の自像(高芙蓉の極を添ふ)、利休旧蔵木守の茶碗、輝元手沢の呂宋茶壺等あり。又穆公の苦辛図セしめられたる禽鱗木花の標本数帖は、精巧驚くべきものなり。紀念のため後藤芝山手記の詩稿二冊、林家遺墨等を贈らる。夕景、辞して旅館ニ帰へる。前橋孝義来訪、讃岐案内を贈らる。明日、屋島行ニ付、中村祐」(九〇ウ)吉より懇函あり。香川県事務官片岡英儀、同技師藍沢誠一(共ニ新潟県人)来訪。余に請ふに、廿二日開会の報徳会ニ、一場の演説を為さんことを以てす。即ち諾す。教育会主事三□艾来訪。明日夕刻、同会幹部の小集ニ招待の意を伝ふ。余より会の図書館ニ学校のアルバム外二三の刊行物を寄贈す。校友松本千太郎、菊池武麿外二三人来話。十一時客漸く散す。」(九一オ)

念一日

晴、風。早朝より前橋、岡田、中村(新太郎)柄沢(雅治)、吉田益栄等来訪あり。柄沢、中村の案内にて、けふは先つ栗山堂を訪ひ、屋島ニ廻ハる予定にて、八時旅宿を発す。栗山堂は、五剣山下字牟礼と云ふ地にあり。柴野栗山生誕之地なり。一昨年、百年祭之折経営する所と云ふ。到り見れは、新造の小屋にて、栗山の木像を置くのみ。別に見るへきものなし。去って屋島に赴むく。屋島、木田郡潟元村にあり。高松を距」(九一ウ)る東方二里十六町にして、山麓ニ達す。これより山道、路稍々蹊なり。余は籃輿を僦ふて行く。昔し西行かやとりして、こゝに仮寝のたゝみ、石月はこよひの主なりけり、と口吟せる疊岩の故蹟を見て行く。山中松樹多く風光可なり。道も

小松宮殿下御通過の際（三十六年頃）修繕を加へたるため、意外に直りありて、すべて心よく、余り退屈を覚へさる内、山頂に達し、可祝旅館の支店に着す。こゝは風光絶佳の処にて、男木女木と唱ふ」（九二オ）る雌雄島は盆石のことく海中に並立し、遠くしては大槌小槌の岬あり。眼下には浦生の漁村あり。高松市街亦庭中のものたり。風景実に婉麗を極む。小憩の後、茶店を出て東北に向ひ、窄路を履むて行く。四五町にして、談古嶺に抵る。これより見おろセは、眼下に壇の浦あり。海を隔てゝ咫尺の間に、五剣山を望む。風光佳也。但た、近年此辺漸く塩田に変し海面多く、余地を存セす。恐らく十数年を出すして、全面塩田に化し」（九二ウ）去らんか。故蹟の為風光の為、惜むべき也。屋島寺ニ詣で、寺僧の案内にて宝物を見る。賞するに足るものなし。書院に憩ふて所謂る雪の庭を一覧し（庭中の土質純白、雪の如し故に云ふ）、直ちに去って茶店ニ帰へり、午餐をしたたむ。此地楽製の陶器を産す。又、巻柿と云ふものあり。包装甚風韻あり、共に購ふて家苞とす。山下迄又籃輿に乗り、三時高松に帰へる。家信に接す。機、病状軽快を報し来る。柄沢に新聞の記事二三を筆記セしめ、」（九三オ）数通の絵はがきを認め、一浴仮寝す。前橋外校友来る。基金募集ニ付、市内有力者招待の件を協議す。今夜、教育会事務所に於て、松平会長歓迎会あり。余も陪賓として招待を受け臨席す。会後松平伯爵同伴、其邸を訪ふて、校友会其他の件を協議して旅宿にかへる。木田郡教育会副会長上田富三郎、同幹事池畑惣吉、末広佐太郎、岩部藤太来訪、物を贈らる。十一時寝ニ就く。」（九三ウ）

念二日

晴。中村祐吉、上田富三郎来話。川口万之助（弁護士にて栗山堂を発起セる人）踵て来訪。芝山遺稿を贈らる。山田清作の書ニ接す。川口宅に抵り書画を見る。又、鈴木市長ニ招かれ、其別邸ニ抵り書画十数点を見る。皆稀世のものにて眼を怡バしめたり。午後より、公会堂ニ報徳会講演会あり。余も需めに応して一場の演説を試む。終りて松平伯爵同伴、法泉寺ニ開催」（九四オ）せる讃岐先賢の遺墨展覧会を観る。特別出品中、宋代明代の名画多し。

竹石翁小伝を贈らる。夕刻より市長に招かれ、新常盤の宴会ニ赴く。本県知事小野田元熙ニ会す。二十五年前、監獄研究ニ付、一、二回面会せし後、始めての面会也。又藤沢南岳ニ面す。不在中松平頼親来訪あり。英堂より消息あり。深更迄明後日の招待会ニ付、校友幹事と凝議す。十一時寝ニ就く。学校より賛助員を当地有力者ニ依頼」(九四オ)セし処、四名の候補者共本日快諾ニ付、其旨学校へ通報す。

念三日　晴

今朝睡眠不足の為、頭痛を覚ふ。朝餐後、柄沢を東道として、賛助員を諾したる田中定吉、岡内清吉、広瀬憲之、小田知周を歴訪して挨拶を為す。田中の外不在。知事を訪ふ、不在。文綺堂に立寄、漆器を購ふて、本日の教育会講演会場公会堂ニ抵る。十時半より十一時半に至る迄一場の演説をなし、」(九五オ)私立学校の為めに気炎を吐く。会衆弐千人。午後、同会場に於て、本会創立満二十年紀念式あり、臨席す。式後旅館にかへり仮寝す。頭痛漸く去る。明日学校の会ニ招待セる、市中重立二十名の内四、五の外皆出席之旨回答を得。六時半、松平伯之招待会に臨む。会場公会堂也。半迂の書ニ接す。田中唯一郎、山田清作、林縫之助、英堂に書を与ふ。今夕、松平伯の招待会には、教育会の為出席セる講師其他七八十名の県官、教育家」(九五ウ)等にて如何にも盛んなる会なりし。席の一隅には盆栽を排斥し、縁の両端には杜若花を植へて装飾し、余興には仕掛火戯あり。東京に於ても、見かたき程の意匠を凝らしあり。」(九六オ)

(以下余白二丁)

春城日誌

明治四十二年
五月下旬以降

特
イ4
1919
553

春城日誌
明治四十二年五月廿四日以降 双魚堂主

五月廿四日 讃岐行つゝき

晴。数日の疲労に今朝はおそく起る。本県の貴族院議員鎌田勝太郎を訪問するの外、午前記すべき事なし。午後より教育会付属図書館に招かれゆく。当務の館員を会して、図書館経営ニ関する談話を為すこと二時間ニ渉り、書庫を一覧して帰へる。教育会より春山製の茶器箱を贈」(ニオ)らる。今夜六時より、基金募集の為め市内の重立二十余名を可祝樓ニ招待す。来会者

松平伯爵　小野田元熙　田中定吉
小田知周　片山(ケシ)　北村尚吉
鎌田直三郎　芳谷弥平　広瀬憲之
明石種次郎　塩田伊三郎　鈴木幾次郎
岡内清太　前橋孝義　柄沢雅治
松岡庫太郎

席上、余より早稲田大学の状況を報し、第二期拡張の梗概を陳べ、基金寄付の」(ニウ)勧誘を為す。踵て、松平伯より勧誘あり。何れも承諾を表し、十一時過散会す。

廿五日

晴。学校幹事ニ当地の状況を報す。家児ニ数通の絵はがきを投す。柄沢雅治来訪。十時、市立商業学校ニ至り、前橋校長の案内にて各教場を一覧し、同校生のため一場の講話を為す。午後、昆田文次郎、内子、下村正太郎ニ書を投す。三時より、前橋に伴ハれて、初めて栗林公園ニ到り、」(ニオ)先づ物産陳列館を見、園内を散策す。園は、紫雲山下にあり。もと松平家の庭園也。風致并ニ規

翻刻『春城日誌』明治四十二年五月

模、岡山の公園ニ比すれは、優に幾等を抜くを覚ふ。校友会場と定めたる掬月亭ニ入る。校友の会するもの二十六、七名。知事其他賓客の会するに先ち、余より基金寄付勧誘の談を為す。松平伯よりも口添へあり。其結果直ちに二千円之申込みあり。それより宴会に移る。知事、県官、賛助員列席。議」(二ウ)事終って後、会長（松平伯）の挨拶ニつき、余一場の演説を為す。今夜快雨あり。不在中、小田知周来訪あり。今夜初めて、早く寝に就くを得たり。

念六日

雨。松平伯より鯛の浜焼を贈らる。小野田知事、挨拶のため来る。柄沢雅治ニ簡す。十時より旅宿を発し、大西行礼を木田郡氷上村ニ訪ふ。浜村蔵六より、久しく聞く人なれとも、遇ふは初めて也。主人款待、一見旧の如し。」(三オ)珍蔵の図書と印を示さる。午餐の饗を受け、玩賞時の移るを知らす。薄暮辞し去る。阿部絹洲所刻の游印一を贈らる。今夜、校友会幹事を、余の旅宿ニ招飲す。

廿七日

雨霽。昨日来感冒の気味あり。田中幹事、山田清作の書ニ接す。学校ニ発電、送金を求む。鈴木幾次郎を訪ふて話す。松平伯、昨日来発熱、病臥の趣を聞き訪問す。前橋孝義の書ニ接す。川口」(三ウ)栄之助を訪ふ、不在。後藤方ニ漆器を購ふて帰へる。校友下津揆一より自製の燐寸（標本用）を贈らる。午後より閑臥、半日の静養を為す。大西拝梅ニ書を投して、前日の款待を謝す。柄沢雅治を招き、基金取纏の事を托す。午後より声全く枯れて、談話に不充分を感す。今夜食を廃して、早く眠る。

廿八日

好晴。気分よろしからず。医を招き診察セしむ。さしたる事にあらずと云ふ。」(四オ)声のかれたるは、うかひ薬の過きて、刺激したる外ならずと云ふ。明朝、松平伯ニ先たち出発と決す。英堂の郵書来る。松平家の家扶上野、見舞之為来る。東京の浜村蔵六ニ書を投す。前橋孝義来訪。踵て漆工後藤、骨董を齎らし来り示す。明代の印筐を購ふ。後藤より乾漆の鯉魚三尾を贈らる。昆田の来電ニ接す、賀田の事ニ関す。周魚一双前橋へ遣す。明朝出

発ニ付、行李を整理し、宿屋ニ勘定を為さんことを促す。松平家より万般賄ふ事」(四ウ)ニなり居るとて、茶代すら受取らす。旅館主人の頑固には幾んと困り果てたり。去るにても、松平家も流石に富饒の華族也。余は、さる厄介をかくる念画、毛頭もなきに、同家は、飽まで余を賓客として待遇セること、今に於て愈々分明し、其の余に対するの厚きに感じ入りたり。学校幹事并ニ神戸の大島恒次郎ニ電報を発し、帰期を報す。夜に入り、前橋并ニ校友会幹事来り会す。告別の為、松平家并ニ小田知周、岡内清太、田中定吉、広瀬憲之を歴訪す。後藤商」(五オ)翠園、林谷山人の菊の幅を齎らし来り示す。食指動き購入。行李を整ひ寝ニ就く。時正さに十二時也。夜来雨。

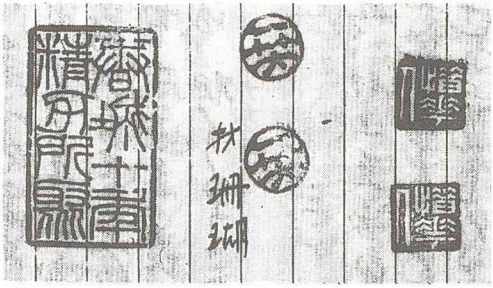
廿九日

快晴。四時半起床。松平家より、浜焼鯛一双を贈らる。七時、高松を辞し、九号宇和島丸ニ投す。左の人々、見送のため桟橋迄来る。

松平家令扶三人、片岡英儀(事務官)、岡内清太、広瀬憲之、前橋孝義、中村祐吉、菊地武麿、柄沢雅」(五ウ)治、外教育付属図書館員二、三名。(以上藍筆船中に認)海上波平穏。船室又多く客なし。横臥、睡を補ハんとすれとも得す。読書も懶し。購ふ所の林谷の画幅を船室ニ掲けて翫賞す。又雑記に讃岐滞在中の所見を録して時を費す。午後一時神戸着。偶々、松平頼親(頼寿伯兄)の高松ニ帰へらんとするに会し、船上ニ訪ふて挨拶を為す。蓬萊舎ニ投す。大島恒次郎来訪。大丸の件を内議し、終って同伴大丸店を一覧し、諏訪山の中」(六オ)常盤に晩餐の饗を受け、六時三十分、急行汽車に投す。此汽車、露国より帰朝の途次船中に病死セる、二葉亭四迷の遺骸を載セたり。京都にて、下村正太郎面会之為車中に来り物を贈らる。

三十日

晴。九時新橋着。校員伊藤正等出迎ふ。帰宅後、学長并ニ田中幹事来訪あり。賀田直治、小川為次郎、丹呉翁其他雑信十数通ニ接す。」(六ウ)四宮憲章、蘇氏印略を開版するニ付、来りて協議を為す。近刊の謝氏千家詩選を贈らる。在高松松平伯ニ謝電を送る。昆田文次郎、吉田半迂来



訪。夜に入り松平伯より返電来る。

三十一日

晴。村上直次郎（東京実用女学校々長）、小池素康の紹介にて来り見る。吉田半迂ニ嘱したる印三顆奏刀、春城十年精力所聚の一顆は、書翰之巻ニ押用の分、他之二顆は、秋室印剩所載印」(七オ)の摸刻也。真島桂次郎より、鱒塩漬一尾を贈らる。登校、学長と校務を見る。午後より学長と出版部に到り、漢典余師大成出版の件ニ付協議し、四時より池畔ニ英堂を見る。山田清作来訪。刊行会出版物すべて植字結了の旨を報す。

六月

一日

晴。早朝、吉田半迂来、自今基金部詰を命し、文書を掌らしむることを云々す。種村宗八、出版部用にて来る。和田万吉、朝倉亀三ニ添書を与ふ。友年亀三郎来訪。富塚格治、林瑛ニ紹介す。三井家史編纂員南茂樹、三上参次の添書を齎らし、早稲田の図書を借覧せんことをもとむ。西条丹呉より紫薇を贈らる。礼状を発す。参校事務を処す。前橋孝義ニ書を投す。西」(八オ)尾豊の書ニ接す。又、佐渡発信、会津八一の書ニ接す。出版部より、近刊書二冊到達（坪内の作と評論、抱月の近代文芸の研究）。

二日

晴。山田清作来る。早朝、校用にて小川鉤吉を訪ふ、不遇。中野武営を訪ふて、讃岐行の結果を報す。文求堂ニ立寄、飛鴻堂印譜を見る。去って細川侯爵邸ニ抵り、家扶ニ面して寄付金の事を云々す。登校、事務を見る。高松」(八ウ)の下津揆一、柄沢雅治ニ書を投す。再度、文求堂を訪ふて、飛鴻堂印譜を購ふ。又、国朝宝鑑を購ふ。飛鴻堂、価三百六十円也。牧野謙次郎を訪ふて、経典国字解出版ニ付協議す。

三日

晴。広田金松、骨董を齎らし来る。小滝淳、山田清作来る。下村正太郎来訪。京都小松谷別荘ニ於て余を撮影セる写真出来、四枚贈らる。高橋義彦来訪。賀田金三郎を麻布の邸ニ訪ふて、余の土地経営ニ出資の事を謝す。」(九オ)文求堂ニ簡して、飛鴻堂印譜の代価の内へ、家蔵本を遣す件ニ付交渉を為す。小川為次郎、岡内清太に書を投す。登校、事務を処す。不在中、真島桂次郎来訪、物を贈らる。高松校友より、過般校友と共に撮影の写真を贈り来る。学報原稿不足ニ付、讃州行の記事を草ニ作って投す。

四日

晴。早朝、校用にて加藤正義を訪ふ。病中面会を得す。金子堅太郎、柿沼谷蔵を」(九ウ)訪ふ、共ニ面会を得す。真島桂次郎を関根屋ニ訪ふ、不在。文求堂、琳琅閣ニ図書を観る。広田金松より、永禄刊本貞永式目を購ふ。池畔ニ英堂ニ会し、半日を消す。終に池心亭ニ晩餐をともにして別る。内藤久寛、中村六郎の書ニ接す。

五日

小雨。早朝、高田を訪ふて話す。図書館ニ抵り事を見る。下村正太郎、林縫之助ニ書を投す。赤堀又次郎来訪、刊行会第二期ニ付話す。帰宅後、おしほ、」(一〇オ)帰国の事ニ付来話。真島桂次郎夫婦を関根屋に訪ひ、二女婚嫁ニ付祝儀ものを贈る。同じ宿屋ニ高橋義彦を訪ふて話し、薄暮家ニかへる

六日

夜来雨あり、終日降りつゝく。石黒良縁、山田清作来る。梶田半古来訪、印を示して半日話す。午後より桑田春風来る。手紙の談を為す。富塚格治、朝倉無声来訪。朝倉紹介にて、某印人より春木連湖、藤」(一〇ウ)本鉄石の遺印、各一顆を購ふ。又、可庵武清、吉村黙阿弥等の書翰を購ふ。石沢兵吾より、北海道産の鰊魚を贈り来る。堀江秀の書到る。無声より、大沢俊民の日記を贈らる。広田金松来る。骨董代十円払。日清保険員某来る。和田万吉に紹介状を付す。尽日家居。

七日

雨。友年、小林堅三来訪、小林と図書館計算書を協議す。

下村昇之助、」(二一オ)正太郎来訪。同伴、高田を訪ふて下村家の改革相談をなし、高田同伴、大隈伯を訪ふて、救済方を豊川良平に依頼あらんことを請ひ、十二時登校。一、二の事を処し、下村両人と明進軒ニ午餐を与にし、同伴大丸ニ抵り、改革実行案を作る。夕刻弘文館ニ林、相沢を訪ふて帰へる。会津八一の書ニ接す。

八日

雨霽。林縫之助、山田清作、赤堀又次郎」(二一ウ)来訪、刊行会の前途ニ就き協議す。池田竜一、早稲田倶楽部の件ニ付来話。雑誌現代記者小森徳治来訪。需ニ応し同誌のため一場の談話をなす。岡内清太の書ニ接す。午後より登校事務を処す。前田仁太郎を鎌田松造ニ紹介す。小川為次郎より、金四十円入書状到来(古写本源氏物語割与)。高田新聞八千号を祝する為、新井昌平ニ談話を口授、筆記セしむ。不在中、真島桂次郎来訪、埃及煙草を贈らる。」(二二オ)

九日

雨。木村勁之助、早川鉄治の紹介状を齎らし来る見る。(ママ)半迂ニ嘱したる大椿八千の大印、昨夜中にて奏刀。これは高田新聞八千号を祝するために作る所也。久成堂(車久太郎)、書画を齎らし来り見す。道春書簡一幅預り置く。下村正太郎来訪、同伴、大隈伯を訪ふ。下村の為めに招かれたる、豊川良平既に在り。伯より、下村の為め尽力すべき旨請求あり。豊川も大体諾意を洩らして相別る。登校事務を処す。」(二二ウ)高田新聞へ八千号の原稿と印を郵送す。お志保帰国ニ付預り金全部返却す。日清印刷会社より、五分の配当を為す旨通知状来る。夕刻より矢来倶楽部ニ於て編輯会を開き、次年度政治経済科の編纂方針を決定す。田代亮介より、中島木鶏の書簡一通を贈らる。

十日

晴。相沢潔来訪、物を贈らる。辻川武之進、広田金松来る。小川為次郎、文」(二三オ)求堂、田代亮介、石沢兵吾ニ書を投す。斎藤精輔を訪ふて、三省堂より図書館へ寄付金の事を談す。下村件ニ付、串田万蔵を三菱銀行ニ訪ふて話し、昆田を古河事務所ニ訪ひ、参校事務を見る。又、

学報編輯会を開き、二三の要件を決す。上野ニ英堂に見る。高木骨董舗ニ物を購ふて帰へる。不在中、本間十三郎来り、物を贈らる。友年より、松花堂の消息を贈らる。」（一三ウ）

十一日

雨。今朝、不用骨董八点を高木勘定の内へ遣す。本間十三郎、山田清作、高橋義彦来話。和田万吉洋行送別会の件ニ付、加藤万作来る。池田竜一、田中唯と高田学長方にて、早稲田倶楽部の計画案を協議す。高田の内藤武八郎よりチマキを贈らる。午後、英堂を訪ふて半日を消す。

十二日

晴。早朝、下林貞雄、鎌田松造来訪。お志」（一四オ）保帰国の事ニ付、協議して去る。校用にて馬越恭平、清浦奎吾を訪ふ、不遇。山本条太郎を三井物産会社ニ訪ふて話し、団琢磨を三井鉱山部ニ訪ふ、不在。大丸ニ下村正太郎と話し、昆田文二郎を訪ふて帰へる。午後より参校、事務を見る。午後半迂来る。増子と話す。夜に入り桑田正来訪、書翰談をなす。蜀山人手紙四冊、中島木鶏書簡一、園女等を載セたる軸一貸付。尾崎行雄（東京市教育会々長）より夏期講習会ニ出演依頼状来る。」（一四ウ）

十三日　日曜

丸山新十郎（高田新聞社長）より、高田新聞八千号に是非来る様申越す。山田清作来話。本日、有賀長雄の多摩川漁鮎に招かれたるもゆかす。末女を携へて、浅草辺に散策し半日を消す。夜に入り、旗野蓑織来話。」（一五オ）

十四日

雨。早朝、田代亮介来訪、早稲田の医学部ニ付談話して去る。山田清作来訪。新潟新聞壱万号、本日到達、余の懐旧談一頁を載す。文求堂へ国朝宝鑑返却。相馬永胤を訪ふ、不在。登校事務を処す。香川県知事小野田元熙の書ニ接す。香川県報徳会発会の席ニ演説したる趣旨を、新井昌平ニ口授筆記セしむ。香川県農会ニ贈らん為也。田原栄、安田恭吾来る。安田より長胤書簡、嵐渓の幽水を購ふ。嵐渓七円五十銭、払未済。」（一五ウ）

十五日

晴。早朝、校用にて相馬永胤を訪ひ、又、団琢磨を訪ふ

て用件を話す。渡辺嘉一を訪ふ、不在。小師橘三郎、旗野蓑織来訪。登校事を処す。三井家より特ニ有賀長文を学校へ遣し、井上侯の指図にて学校の寄付金を断ハる旨を云々す。右に付学長より、余并ニ大隈信常、田中唯一郎を招き内密協議ありたり。伊藤会計幹事と図書館の経済ニ付協議す。今夜、旗野蓑織の家政改革ニ関し増田義一、吉田東伍と偕楽園ニ会」(一六オ)し凝議する所あり。

十六日

晴。図書館予算の件ニ付、小林堅三来る。堀江秀、骨董商車某来る。金子堅太郎を訪ふて、校用を弁す。高木方を訪ふて茶箱を購ふ。茶器はすべて、楽吉左衛門作、紀州侯の作らしむる所と云ふ。汲江斎の銘ある茶酌を添ふ。野田屋を訪ふて堆黒支那文庫を購ふ、価三十円也。高木分とも払済。巽李軒より、高野長英自筆西説医原枢要四冊を」(一六ウ)示さる。これは一巻出版、他未刊のもの也。朝倉亀三の書ニ接す。英堂と会し夜十時帰宅。香川県農会へ、報徳会に於て余のなしたる演説筆記を郵送す。

十七日

梅天濛々。気分勝れす。坪内を訪ふ、不在。登校の上帰宅、午後より在宅。江部淳夫来話。

十八日

」(一七オ)

晴。早朝より水谷弓彦、山田清作、牧野謙、辻川武之進来訪。登校事を処す。新潟新聞へ懐旧談の補遺を遣すニ付、新井昌平ニ口授筆記セしむ。完結に至らす。午後より刊行会の前途并ニ身上の事ニ付、坪内を訪ふて話す。帰宅後、大丸より下村両人、大島来訪、整理の件ニ付、長時間協議して去る。旗野蓑織来話。杉谷代水より近著希臘の神話を贈らる。余の懐旧談を載セたる高田新聞八千号ニ接着す。坂口」(一七ウ)五峰、山田穀城ニ書を投す。小川為次郎、吉田益栄の書ニ接す。今夜十時、お志保帰国の途につく。今朝、日蝕あり。

十九日

雨。中村六郎(信州)より、一茶同好会の記事を贈らる。学長を訪ふて、刊行会の前途を協議す。図書館ニ抵り事務を見る。新井ニ新潟新聞懐旧談、昨日のつゝきを筆記セしめ、新潟新聞ニ投す。午後、桑田豊蔵、早稲田学(ママ)校

の件ニ付来話。踵て「現代」記者小森徳治来り、雑誌ニ掲載」(一八オ)の談話を乞ふ。即ち報知新聞の今昔を話して、筆記セしむ。旗野蓑織、前夜会合之決議録を作り来訪、調印を乞ふ。加賀松雲公の伝を読み夜に入る。

廿日

日曜。早朝、松尾臣善を赤坂の邸ニ訪ふ、不在。昆田文次郎を訪ふて話す。琳琅閣ニ図書を検し、英堂ニ会し夕刻帰宅。不在中、小柴卯之七来訪。燈下、松雲公図書蒐集仕末を随筆」(一八ウ)ニ書き込む、十数紙を筆し終り、寝所ニ入るも眠を得す。又、書翰保存ニ関する所見を随筆にものし、十二時ニ至り漸く就眠。

廿一日

雨。刊行会第二期の件ニ付、弘文館の林、相沢来る。山田も来り会し、午前中凝議して去る。内藤久寛の書ニ接す。午後登校、事務を見る。今夕、大隈邸へ株式仲買委員八、九名を招き、基金寄贈の依頼を為す。渋沢男、中野」(一九オ)武営両氏出席、外に学長と余、田中幹事出席す。在米エール、朝川(ママ)貫一より刊行会出版物を、エール大学へ遞送すべき旨来翰あり。

廿二日

雨、晴。広田金松より、松花堂佐川田昌俊へ与ふる書簡一軸を購ふ。七円五十銭の内五円五十銭払済。半迂来り、二月以来刻する所の心経の印五十四顆を示し、印譜を贈らる。書翰のすゝめと題する原稿十枚を、手紙雑誌社」(一九ウ)ニ投す。内子腹部に病あり、医師を招き診セしむ。欣賞会(廿四日)の通知来る。登校事務を見る。松平頼寿伯より自製肖像の絵はかきを贈らる。佐々木侯爵(高行)より二十九日、華族会舘ニ於て小会を催す旨の案内状来る。増子喜一郎来訪。佐藤伊助出京之事を報す。学報記者秋田来訪。

廿三日

雨。山田清作来話。増子喜一郎の書ニ」(二〇オ)接す。牧野謙次郎を訪ふ、不在。久須美秀三郎を訪ふて華山の粉本一枚貰らひ受く。安田恭吾来訪、一、二の書画を示さる。建物会社より、旧負債九百四十円ニ対する催告状到達。午後より、下村の為豊川良平を三菱銀行ニ訪ふて話す。

建物会社催告の件ニ付、興業仲介所ニ木村を訪ふて帰へる。大島俊造来り物を贈らる。双魚堂書翰目録を浄写して夜に入る。」(二〇ウ)

廿四日

雨。早朝、佐藤伊助を築地の金水館ニ訪ふて話す。松平頼寿伯、香川県より帰京ニ付、九時新橋迄出迎ふ。柿沼谷蔵を校用にて、小網町店ニ訪ふ、不在。高木方ニ古万古菓子鉢を購ふて帰へる。不在中、桑田春風来訪。午後登校、図書館事務を処す。夕刻より、明進軒ニ出版部の部員会を開く。

廿五日

雨。田代亮介、藤根常吉(同仁医学校」(二一オ)理事)来訪、早稲田の医学部経営ニ関して云々す。学生葛西亮二来訪、竹村良貞ニ紹介す。琳琅閣を招き、雑本を借勘定の内へ遣す。五十四円五十銭也、払済。大島俊蔵、不二保険会社へ傭ハるゝニ付、保証の調印をなす。増子喜一郎、余の落合村ニ所持の土地を、内藤子爵家へ譲る件ニ付来話。午後、英堂ニ会す。

廿六日

雨。早朝より校用にて、松尾臣善、」(二一ウ)高橋是清を赤坂の邸ニ訪ひ、添田寿一を興業銀行ニ訪ふ。又、林縫之助を訪ふて半日を消す。帰宅後、坪内を訪ふて身上の問題を協議し、三時より交詢社に於て、図書館協会例会を開き、終って和田万吉洋行の送別会を開く。昆田文次郎、羽田知証の書ニ接す。

廿七日

大雨。早朝より、宅へ山田清作、林縫之助、相沢敏太郎を招き、第二期刊行」(二二オ)会の協議をなし、十二時ニ抵り散す。桑田正の書ニ接す。七月一日、文芸協会研究所茶話会の通知を得。本日四時より、華族会館に於て講師慰労会を開く、余も出席。

廿八日

雨。早朝、昆田を訪ふ。又、大丸屋ニ下村正太郎を訪ふ、不在。羽田智証を訪ふて話し、興業仲介所ニ立寄、清水と話し、午後英堂ニ会す。夕刻より、校友会幹事会を開き、倶楽部」(二二ウ)設置の件等を協議す。

廿九日

雨。けふは吾か家の大晦日也。今朝、台湾賀田直治より、余の土地経営資金として送りたる一千円也、昆田より受取。第一銀行にて正金受取、右の内一時六百円也繰替。増田義一、壱百円。水谷弓彦へ壱百円（尚壱百円残る）。五十円也、昆田文二郎。壱百円也、学校会計。壱百円也、斎藤善作（此口これにて済む、これは多年吾家の累をなしたるもの。羽田智証」(二三オ)の周旋にて示談済む）。刊行会編輯員二人解傭ニ付、手当五十五円也。右、渡済む。此等の事ニ関し朝来、増田、羽田、文求堂、水谷を歴訪し、午後登校、事務を見る。坂本嘉治馬より一千円の手形、書かへをもとめ来、直ちに書換遣す。これは土地経営費へ差入之事、前に坂本より承諾を得たる口也。学校次年度予算縮少ニ付、図書館の予算三千円を減縮するに至る。困窮甚し。文求堂へ、飛鴻堂印譜残金百九十円之内七十」(二三ウ)円渡済。高木弘方買物代二十八円程の内十円相払。不在中、土屋詮教来訪。文求堂より、鐘具款識を金族(ママ)版に付したるもの二枚贈らる。本日印刷会社より半期配当三十七円五十銭受取る。株ニ対する配当也。佐藤伊助、萩野榛太郎ニ書状を発す。夜に入り牧野静斎来話。

三十日

半晴半雨。広田来る。螺鈿箱入支那製印筐一を購ふ。高田を訪ふて、図」(二四オ)書館予算より三千円節減されたる件ニ付打合をなす。又、刊行会第二期の件ニ付、打合せをなし長時間に渉る。登校、伊藤正、小林堅三と図書館の予算ニ付協議す。本日、学長より来二日、維持員会ニ余を理事に推薦する件を提出するよし内示あり。これ迄定款には理事一名の処、今度定款に拘らす、別ニ一名を置き事実上、校長を代理セしむる権限を与へ、専ら基金募集の衝に当らしむる目的を以って設くる訳也。午後、高」(二四ウ)木を訪ふて根来の角切黒漆塗香合一を購ふ。今朝購入の印筐修膳を高木ニ托す。落後生来話。山田清作、朝倉亀三、又踵て来る。斎藤善作へ差入の証書、示談済ニ付戻る。水谷弓彦の書ニ接す。高田弥一郎ニ書を投す。」(二五オ)